ぼっちのじかん

お話下手

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これだけは絶対にならないと思っていた。　俺にとって良い思い出が一つもなく、トラウマばかりの毎日を過ごした学校、その教師に。上手くいきっこない、どうせすぐ辞めると思っていたが、そこで俺は可愛らしくてませていてエッチで、そして残忍な小学三年生の女の子に出逢った。

目次

ぼっちのじかん　前編 ―― 1
ぼっちのじかん　後編 ―― 29
ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】 58
ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】２ 71
ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】３ 84
ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】４ 96
ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】５ 109

ぼっちのじかん　前編

教師とはこの世で最もキツいサービス業である。

幼稚園・小中高校などの教職員の時間外勤務は1カ月平均で７２時間５６分、さらに自宅で仕事をする時間は、約２２時間半、部活動が増える中学では、時間外勤務は１１４時間２５分にもなるらしい。　生徒指導や保護者対応で忙しくなったほか土日の仕事が増えて残業時間を押し上げている。

夏休み冬休みも、基本は毎日出勤。水泳指導や家庭訪問など子どもに直接関係する仕事の他に、会議や学校での職員作業（草取り、環境整備などの校内大掃除）。　それだけではない、夏休みになると「研修会」「講習会」「研究大会」などが、この時とばかり開かれる。毎日2箇所同時に出席しないと消化できないほど。

影分身の術でも使えないだろうか。

先生が一生懸命組み立てた授業でも、生徒はなかなか聞いてくれないこともあり授業中の居眠り、遅刻、ボイコットなど、真面目に受けてくれない生徒は間違いなくいるはずだ。

生徒間のいざこざ、教師に対しての暴力、他人への暴力、そして万引きや傷害など、さ

まざまな頭を抱える問題が。　何か悪いことが生徒に起こった場合、全力で責任を追求、職を失うリスクも。

やっぱ働くってないわー。

部活動をやっている報酬は、若干出るところもあるが、ほとんどボランティア、さまざまな子供たちを一人ひとりを把握し、荒れている子ども、アレルギー体質、障害などについても考慮しなければならない。

総括しよう。　残業は当たり前、休日出勤で雑用の毎日、出たくもない会に出席し、お客様（生徒）は常識が通じないのに糞生意気なガキばかり、お客様が何か問題があれば責任が此方へくる可能性も。

うん、理不尽である。　故に教師とは最もキツいサービス業だ。

…結局何が言いたいかといえば、察しの良い人は既に気づいているだろう。

「早まったかもしれん…」

自らの前に立ちはだかるのは、高さ1，5メートル程の簡素な門。　広大な敷地内をグルリと囲むコンクリートの壁と1つに繋がっている、小学生でさえ頑張れば登れるそれは、俺にとって邪悪なるパンデモニウムにしか見えない。　外側から中を覗けば糞生意気そうな小悪魔達が愉しそうに走り回っている。

「比企谷先生、早くいきましょう！」

隣で眼鏡がキラキラと眩しい瞳を輝かせ急かす。　青木大介よ、お前にはあのデビルズ・サンクチュアリが見えないのか？

良さげに見えて、実は毎ターンライフが１０００ポイント削られるんだぞ。　アニメ版のルールなら４ターンで死ねる。

これも全部、我が恩師と雪ノ下達のせいだ。　何が公務員の中で教師は良いだ、普通に考えて一番キツそうだろ。

それにホイホイ乗っちゃう俺もどうかと思うが、アイツらの説得が言葉巧みすぎる。

催眠術の資格でも持っているに違いない。

じゃなきゃ専業主夫で一生を過ごすと決めていた俺がこんなところに、小学校の先生なんてやるはずがないのだから。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

季節は梅雨入り前だ。　過ごしやすい気温だが、徐々に夏を感じさせる湿り気が確実に近づいているのを実感させる。

本来ならば基本子供達が入学すると同時に、俺達教師も新たな学校へと赴任するが俺と青木先生は事情によりこんな半端な時期に新任を任されることになった。　青木先

生の方は事情を知らんが、俺はあれだ…。

新学期早々、黒いハーレーに牽かれたんだよ。　また同じ車種とか俺はハーレーに恨まれているのだろうか？

それとも雪ノ下か由比ヶ浜の怨念が載せられていたのか、考えれば考えるほど嫌なことしか頭に浮かばないが、ともあれ両手両足骨折という事態に陥ったせいで最初の仕事場でもぼっちスタート確定されたのである。　青木？　コイツ友達多そうだから波長合わなそうだわぁ。

子供達？　人間とすら仲良く出来ねぇのに、デビルズチャイルドに仲良く出来るわけがない。　ていうか子供が友達とか泣けるわ。

いよいよ3―1教室が目の前に迫った。　ここが俺の最初の仕事場である。

いや、本来ならば俺の担任だったんだがな、確か…中村先生だったか？　あの人辞めたから元々の位置に戻ったに過ぎない。

中村先生良いなぁ、ニートは良いよなぁ。　くそ、今からでも止めて、平塚先生の専業主夫になるか…？

いや、何故かＢＡＤ　ＥＮＤしか見えないからやめておこう…。

「今日から新しい先生がくるみたいだよ！」

「どんな先生かな、楽しみだなぁ」

「カッコいい人だったら良いよね！」

フッ、早速扉の向こう側では俺の噂をしてやがる。　期待を裏切る結果にさせて悪いが、こちらとら伊達に目が死んでるアンデット君をやっていない。

見ればショックだろう、何故お前みたいな奴が担任なんだよと。　あれ、なんか泣けてきた。

くっ、この扉は重いぜ…！　でも俺は開ける！

「おはよーございー、ます…」

「え？」

「え？」

気合い充分、声はやる気無さげに扉を開けると目の前に広がる光景は、女子生徒達が着替えている状況であった。　え、なにこれ、恐い。

見れば簡素な白い服を其処らかしこで着ている、着ていない子もいるが。　どうやら次は体育の授業だったようで体育服に着替えていたようである。

ちょ、八幡聞いてない。

「きゃあああ！」

「先生のエッチー！」

ちょっと待て小学3年生でハァハァする程、俺は落ちぶれちゃいない！　戸塚には

ハァハァフヒヒだけどなッ！
「えっと…大丈夫だ。　見る程の物でもなッ――!?」
顎に強烈な一撃を受けて一発ＫＯ。　誰だ、国語辞典投げた奴は……がくッ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あれが新しい担任？　なんか目が死んでるね、りんちゃん」
「そうだね」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

最悪である。　自己紹介のために黒板へ自分の名前を書き込んでいくが、背後から俺の陰口が聞こえてくるのだ。
やれ痴漢やら変態やら覗きやら、隠すもんも無いくせに……って、誰だ今俺のことをゾンビみたいな目と言った奴！
「きょ、今日から君達の新しい担任になった比企谷八幡だ。　よろしく」
相手は南瓜南瓜。　昨晩散々練習した簡潔に、尚且つ的確な自己紹介終了。

オドオドしないかひやひやしたが、なんとか平常に言えた。　…言えたよな？

『よろしくお願いします！』

驚いた。　みんなが一斉に此方へ名一杯の挨拶を返してくれたことに。

俺の小学を思いだせば、元気良く返事のふりをして教師からあれー？　声が小さいなぁ？　とか明らかに聞こえているのに聞こえていないふりをするウザい教師がいたから絶対やらねぇとか考えていたけど、これなら心配する必要は無さそうだ。

たまにあるよな、やたらテンション低い奴らだけで構成されたクラス。　それでも俺のぼっちは変わらないのだが今はこの話し関係ねぇ！

「それじゃ、顔と名前を覚えるために出席をとるぞ」

ちっ、自分で顔と名前を覚えると言ってむしゃくしゃしてきた。　俺の頃は比企谷って誰？　って言われるのが当たり前だったが俺の教師になったからにはそうはいかない、絶対に覚えてやるぞー、ぼっちサーチ舐めんなよー。

お、今の八幡的にポイント高い。

「えー、先生のこと色々教えてよー」

横槍入れるな！　先生の自己紹介は先程終わりました、これ以上はない。

えっと、今話しかけてきた足まで届く髪を二つ結びにしているあの子は確か……九重りんか。

くっ、見れば間違いなくクラスの上位カーストに位置しているような雰囲気だぜ。美少女で活発な性格、初対面の大人に怖じけづきない肝の座りよう、絶対に俺とは合わなそうなタイプである。

あーしさんみたいだな。

「せ、先生のことより、先ずは君達の方が先だ。　少しずつ教えていくから」

「はーい」

ＯＫ。　素直な子供は好きだぞー。

「気を取り直して……相田」

「はい！」

「飯塚」

「はい」

「宇佐美々」

「先生、宇佐ちゃんは体調不良でおやすみです…」

…やはり返事はないか。　クラスに１つだけ空きのある席、入った瞬間に気づいた。出席名簿も見ればここ１ヶ月不登校のようで最近である。　初めはイジメかと思ったが、机に落書きの後はなく掃除はされているようで綺麗だ。

わりとクラスでの扱いが丁寧だし、どうも違和感を感じるな。　なーんか初っぱなか

ら面倒な事情がありそうだ。

「次、鏡黒」

「はーい」

やる気無い返事を返したのはクラスでも特に身体が小さい女の子。　名前の通り、真っ黒な黒髪長髪で俺には目も向けずにスマホを弄っている。

おい、先生が目の前にいるんだけど。　あれか？　既に俺のことなんて存在していない人間として扱われている？

先生なのに存在が確認出来ないなんて、いよいよ俺はまどマギの理から消滅してしまうのではないだろうか。

「つ、次…九重りん」

「はいはい！　はぁーい！」

返事は一回で良い。　三回も言わなくても存在を認識出来るから。

いや、ちょっと待てよ…返事を沢山すれば認識されやすいのかな？　雪ノ下に比企谷くんって言われた時、沢山返事をすれば二人はきっと友だ――ないわぁー、罵倒されている未来しか見えないわぁ。

「ねぇねぇ！　比企谷先生って何歳？」

「先生とのさっきの会話、もう忘れたの？」

自己紹介は後って言ったよな。
「良いじゃん、減るもんじゃないし」
「先生のテンションとＳＡＮ値が下がるわ」
「面白ーい！　なにそれきもーい！」
「がッ!?」
小学生にきもーいって言われた…。
「じゃあさ、彼女はいるの？」
「い、今その話しは関係無いだろ…？」
「あはは！　いないんだ！」
子供は空気を読めるのに残忍である。　世の中には空気を読めるのに残忍な大人もいるが。
「なら、りんが彼女になってあげる！」
「なんでそうなるんだよ」
ていうかいつの間にか普通に話してるし。　俺とお前は友達か？　友達だと思うだろ。
「だってぇ、先生にりんの裸見られたもん。　責任取って…？」
上目遣い止めろ、猫撫で声止めろ。　メチャクチャ可愛いじゃねぇか、ロリコンに

なっちまう。

「いいか、女の子がそういうことを言うのは止めといた方が良い」

「うわぁ、早速説教がきた。　どうせ自分を大切にしろとか言うんでしょ」

ノンノン、ところがギッチョンなんだな。　鏡黒よ。

「これは俺……じゃなくて知り合いのA君の話しなんだがな。　A君が小学あれは丁度3年生の頃だ、図書室で本を探している時、後ろから声をかけられた。　その子は自分のクラスでもスポーツ万能な人気女子の親友でな、彼にこう言ったらしい。　A君って好きな子いるの？　ってな。　A君は答えた。　いや、いないよ。　…と。　A君の心は一気に暴れまわった、何故ならA君はクラスでも地味で目立たずおとなしい男の子だったので女の子に話しかけられるのに驚いたからだ。　え、何？　何なの？　とクールに装いながらも内心では疑問の渦がグルグルと回る。　まさかこの子、俺のこと好きなの？　そんな考えさえ過ったが出来ればA君にとってそれは勘弁してほしかった、何故なら話しかけてきた女の子はA君にとってあまり好みのタイプではなかったからだ。

だが、その予想は良い意味で外れることになる。　女の子は話しが終わるといつの間にか背後にいた別の女の子、話しの冒頭に登場したスポーツ万能の人気女子のそばにより、耳元で何か囁くと人気女子は真剣な表情で頷いていたのである。　A君に衝撃が走った、まさかこれは…自分とは月とスッポンほどの差があるあの人気女子が俺のこと

を好きで友達伝いに好きな子がいないか確認したのではないのかと。　これには流石のA君も心臓がレボリューションした、彼にとってその女の子はちょっと好きになりかけていた存在だったからである。　自分に自信のないA君は当然、その子に告白なんて出来な……おいちょっとお前達、寝るな。　話しを最後まで聞け」

「だって先生の話し長いんだもん、どうせフラれたってのが落ちなんでしょ」

一斉に頷く3―1組。　くそ、お前らエスパーか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ああ、疲れた…。　無事に午前の授業を終わらせることが出来たが初日の前半でこれ程とは、やはり仕事するんじゃなかった。

溜め息と共に職員室に戻り椅子に座り込むと、目の前に湯気たつ緑茶が置かれる。

青木先生の前に。

「お疲れ様です。　青木先生」

あの…俺の分は？

「あ！　比企谷先生居たんですか!?　すぐに用意しますね」

3―3の担任であるボイン、じゃなくて宝院先生が気をきかせてくれたらしい。　ふ

ふっ、どうやら別に俺の存在に気づいていなかったとかそう言うわけではないようだ。

（白目）

やめてください、今の俺に優しくすると好きになりそうなので。

「あ、比企谷先生」

同じく俺の存在に気づいた青木先生、その顔はとても明るく穏やか。　俺と同じ新任のくせにリア充の余裕か？

「実は比企谷先生に同じ新任として色々相談したいことがあるのですが…」

同じ新任ねぇ。　青木先生自身も不安があったのだろう、自分と立場が同じ相手ならば話しやすいし、対等としての意見も交換しあえる。

駄菓子菓子！　青木よ、お前は俺の様子を見てどう思う？

お前に比べて明らかに上手くいっていない奴にしか見えないはずだ、そんな俺の意見を聞いたところで役にたつことなんてない。　俺と話すくらいならベテランの御矢島先生か白井先生に聞いた方がよっぽどマシである。

「俺、ちょっと疲れてて…」

「そうですか。　スイマセン…」

なんで謝んだよ、俺の方が悪いはずだろ。

「しょうがないですよ、3―1の子達うるさいですから」

宝院先生の言う通りである。　アイツらの騒がしさは恐らくこの学校中最強なのではないかと言われるくらい元気いっぱいなのだ。
誰だよ、俺をこのクラスに指名した奴、悪意しか感じない。
「色々と大変でしょう。　困ったことかあったら、何でも相談してくださいね」
細目の中年、御矢島先生が後ろから優しげに声をかける。
「じゃあ、ひとつ聞きたいことがあるのですが。　この宇佐美々って子、1ヶ月も不登校ですね、何があったのですか?」
「あー、その子ですか…」
困り顔で頭をかく御矢島先生。
「実は我々の間でも理由がよくわからなくて。　恐らく前任の中村先生が何か関係しているのではないかと思うのですが、子供にアンケートを取ってもわからない結果しか出ないもので…」
その様子にウソ偽りはない。　宝院先生も同じく表情はかなり渋かった。
ということは子供達自身が何か隠している恐れがあるな。　知らないはずがない、それでも語らないということは自分達自身を守るために答えていないということになる。
…とか言ったりして。
さて、そろそろ行くか。

「あれ？　比企谷先生、どこ行くんですか」
「トイレです」
ウッソー。　本当は昼飯食べに行くんだよ。
俺の分の給食、存在してなかったから買いに行かなきゃいけないし、それにこんな人の多いところで落ち着いて食べられないしな。　あと、白井先生から鬱陶しいって顔されてるし、青木先生と宝院先生はなんかラブ臭がするし、御矢島先生は……関係ないか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

体育館の裏。　滅多なことでは人が通らなそうな場所に弁当箱を広げるぼっちひとり。
ああ、この空気久しぶりだわ。　懐かしくて涙が出ちまうぜ。
「にゃー」
「あん？」
塀の端にある茂みから不細工な野良猫が現れる。　なんだよ、こっち見んなよ。
この唐揚げは俺のだぞ。
「にゃー」

くそ、コイツ馴れ馴れしいな。　すり寄るんじゃねぇよ、甘えんじゃねぇよ。
俺よりランクが上のかまくらより可愛いじゃねぇか、お持ち帰りしたくなる。
「にゃー」
「わかったよ、ほら…」
去らば、唐揚げ。　お前の犠牲は無駄にしない。
「二ャー、どこいるのー？」
はわわ、敵が来ちゃいました！　ご主人様！　＞＜
「あ、比企谷先生だ」
「こ、九重か？」
２つのピンク色の大きなボンボンが付いた髪止めで纏められた、腰よりも長いふわふわした髪を揺らしながら現れたのは、散々授業中に俺を弄り倒した悪ガキ九重りん。
その手には折り畳まれた食パンが握られており、成る程どうしてか、この子が面倒を見ているらしい。
「うそ!?　二ャーがなついている！」
対価として唐揚げが消えたがな。　忌々しい猫が…！
と思ったが、横から立たれた九重にジーッと見つめられていることに気づき、慌てて怨念を断ち切る。　悪霊退散悪霊退散。

「横、座っても良い？」
「ああ、いいぞ」
静かに腰を下ろす九重。　食パンを二ャーに差し出すと、おずおずといった様子でパンをかじりだした。
「前はね、凄いガリガリだったんだぁ。　だからこうして毎日給食の残りを持ってくるの、本当は食パンよりロールパンの方が好きなんだよ」
「ふーん」
まぁ、俺も食パンよりロールパンの方が良いな。　味を感じるし。
「追い出したりしないでよね」
「え？」
猫みたいな目をした九重が俺を睨むように此方を見た。　美少女であるせいか、余計に凄みが増し、かなり怖い。
川、かわ何とかさんを思い出すな。　つーか顔近ぇ、本当に可愛いなお前。
「大人はすぐウソをつくし、誰かを平気で傷付けるし、酷いことする…」
「……」
酷いことする、ねぇ…。　どうも含みがある言い方に中村先生のことが頭を過った。
「動物を大切にしましょうとか言っておきながら、殺したりするじゃない…！」

「まぁ、九重の言う通りだ。　大人って嘘しかつかねぇし」
「先生もウソつくの？」
「メチャクチャ嘘つく。　おかげで目が腐ってるだろ」
下げたくもない頭を下げないといけないし、行きたくもない飲み会に行かないといけないし、常に相手に合わせて会話をしなければならない。
そしてそれは相手も同じ。　向こうも本当はそんなことしたくないのに、しなければならないのだ。
誰かが決めたわけでもない、法律でそう決まっているわけじゃない。　ただ、雰囲気というのだろうか。
それがこの人間社会で形成された真実で闇の部分とも言える。
「先生も大変だね」
「は？」
「嫌な人間社会…」
え、いや…ちょいまて。　まさか俺、口に出してた？
うわあああああ!?　マジきめえええええ！
「比企谷先生、頭抱えてどうしたの？」
「いや、何でもない…」

「やっぱり比企谷先生って変なの」
「よく言われる。　……一応言っておくが、二ャーのことは黙っているから安心しろ」
「本当に？」
疑っていらっしゃる。　いやまぁ、俺は大人だから信用ないだろう。
「確かに俺は汚い嘘はつくし、愚痴は溢すし、卑怯なことをメチャクチャする大人な男だが、猫は殺したりしない。　実家に猫飼ってるからな、かまくらって名前なんだが……」
「あはは！　先生って本当に一言余計だよね！」
「……」
褒めてるの？　馬鹿にしてるの？
楽しそうだから別に良いんだけどさ。　なんかツラい。
「……って、痛!?」
やられた、二ャーに思いっきり人差し指を引っ掻かれてしまった。　鋭利で鉤状になっている猫の爪は人間の皮膚を簡単に傷つけ、カッターで切りつけたように少しずつ血がにじみ出している。
なんなのだこの猫、なついたと思ったら急に襲ってくるとは…。
「貸して」

九重は俺の手を掴むと、自然な動きで指をくわえた。　自身の口内へと。
何やってんだお前えええ!?　指チューか?　指チューなのか!?　漫画やアニメでヒロインが料理の最中に怪我をして、イケメンがフッ馬鹿だなお前……とか言いながら指をくわえるラブコメシーンじゃねぇか!　九重さんマジイケメン!
つかヤバい、舌が中でうねって…変な気分になる。
「ん…、ほら。　血が止まったよ!」
眩い笑顔が向けられた。　此方をからかうような意地悪な笑みではない。
これが、九重りんという子の本当の笑顔なんだろうか。　…むしろこれが演技だったら末恐ろしい。
きっと将来、数多くの男どもがこの笑顔にやられる。
「じゃあ私行くね!」
「お、おう…」
あーあ、何が血が止まっただよ、ドキドキして余計に出血し始めたじゃねぇか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

午後の授業は習字である。　手本の〝希望〟と書かれた教材を黒板に貼り付けて、習

字紙を十字に折るよう指示し、バランス良く書きやすいよう基本は教えた。
後は一人一人見回りをして細かい部分での指導だが、お前ら喋り止めろ！　走り回るな！　手のひらに墨汁を塗って、手形をやるな！　俺もやってたけど！
「先生ー！　見て見て！　りんも書いたよ！」
「意外と真面目に取り組んだな、九重さん……って、お前は何を書いてんだよ!?」
〝中○し希望〟の文字が書かれた習字紙を慌ててくしゃくしゃに丸める。　本当に肝が冷えるから！　こういうのは勘弁してくれ！
「先生彼女いないんでしょ？　私が筆下ろししてあげよっか？」
習字道具である筆を口元に近づけ、舌舐めずりする。　小筆はあれか、俺のマグナムに例えているのか、泣くぞ。
「げっ！　比企谷って童貞なの!?」
俺が否定しなかったからか、鏡黒、お前はなんて察しが良いんだ。　こういう時はな、わかっていても「あっ…（察し）」で対応するんだよ、お子ちゃまめ。
「先生はな、魔法使いになりたいから童貞なんだよ。　トム・リドルからヴォルデモートになったらさっさと卒業するわ」
「はぁ？　マジ意味わかんないだけど？」
くっ、ネタが通じないってツラい。　大半がポカーンだ、爆笑してるのは九重だけ。

お前本当は意味わかってないだろ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

帰りの会が終わった頃には雨雲が空を覆っていた。　夕方により日も沈みかけているせいか、外はもう暗い。

昼まではあんなに晴れていたのにこの天気である。　恐らく油断して傘を持ってきていない生徒もいるだろう、なるべく早い内に帰るよう注意した。

教室から出ると廊下では宝院先生が男子に先生〝パイパイ〟とセクハラ紛いの挨拶を受け、誰がパイパイじゃあ―!…と、切れている。　俺もセクハラした…ゲフンゲフン!

「あ、比企谷先生。　ちょっと良いですか?」

「ふぁ、ふぁい!?」

おどおどしちゃった。テヘペロ

「前任の中村先生についての話しなんですが…」

宝院先生の顔色が優れない。　どうやら何か分かったことがありそれを伝えにきたのか、それも厄介な方で。

彼女にそのまま階段の踊り場へ連れてこられ、差し出されたのは一冊の教科書。　それは生徒達の物とは少し違う、俺達教師専用で作られた教材道具の1つだ。
勿論俺の物でも宝院先生の物でも、ましてや青木の物でもない。　辞めた中村先生の物である。
中を開いて俺は彼が辞めた原因を理解してしまった。　いや思い出したと言った方が正しいかもしれない、本当はこんなこと知っているはずなのに。
「あまり、驚かれないのですね…」
「まぁ、予想は出来たからな」
よく、ニュースで親が子供に虐待、教師が生徒に対して教育という名の侮蔑罵倒が取り上げられたりする。　彼らはこれを世の中の裏側や闇と声高らかに叫ぶが、そんなものは本当の裏とは言わない。
情報社会の現代だ。　腐るほど公開されて最早当たり前のように表へ出ている。
本当の闇というのは強い光の中でこそ生まれるのだ。　ごく身近にある光、例えばそう、子供達とか。
大人も子供も所詮は人間だ、頭でちゃんと考えるし、愚痴も言えば嘘をつき、場合によっては卑怯なことさえ出来る。　未成年、幼いという理由で守られ、闇の一片さえも見せることのないまさに深淵。

だが俺は知っている。　幼い頃から深淵に閉じ込められ、裏側で傷つけられ、そして闇に染まった俺は知っているのだ。
子供だって大人をイジメることが出来ることを。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

降りだした空。　俺は教室の教卓に中村先生の教材を広げて、それらに向き合っていた。
あーあ、思春期じゃない小学校なら中高校生より楽出来ると思ったんだけど、いきなりヘビーな難題だぜ。　正直、先生初心者の俺の手に負えるものではない。
中村先生の方は無理だが、〝この子〟だけはどうにかしないとな。　一応教師だし、与えられた仕事くらいこなさないと給料泥棒である。
「先生」
「…ッ!?　ここここ、九重か。　まだ帰ってなかったのか？」
おおお落ち着け、俺の荒ぶる魂！　バーニング・ソウル！
まずはこの教材をナチュラル・トラップな動きで仕舞ってだな…！
「死ね」

「…!?」

薄暗い教室の中で雷の光が差し込む。

「カス、くせぇ、学校くんな、地獄に落ちろ」

ゆっくりと此方へ歩み寄ってくる九重の表情は、今まで見たことがないような無機質な物へと変貌しており、射殺すような瞳が俺に向けられた。　この子が今言った言葉、それは全て俺に対してではなく、かつての前任、中村先生の教材に書かれた言葉だ。

「これは、お前がやったのか?」

最悪の状況だっていうのに、何故か不思議と俺の声は落ち着いている。

「私はただ、中村先生と同じことをしただけだもーん」

「同じこと?」

九重の表情が変わる。　無機質から悪戯を考えている無邪気な子供のように嘘っぱちな笑みで、俺を試すように見つめた。

「うん、先生が美々ちゃんに言ったこと。　声が小さい、おどおどするな、トロい、すぐ泣くな、お前を見てるとイライラする」

オイオイ、ほとんど俺に当てはまるじゃねぇか。　俺が中村先生の生徒だったら不登校不可避!　つーか宇佐に対して親近感湧く、ぼっちじゃねぇけど親近感湧く!

「『なんで学校来ない』だって?　オメーのせいだっつーのっ!」

まぁ、だわな。

「え？」

まさか自身の怒りに肯定してくれるとは思っていなかったのか、九重は俺の返事に戸惑い固まってしまう。　こういう時、なんと言ってやるのが正解なのか俺自身よくわからん。

「中村先生はやってはいけないことをしたのだから罰は受けるべきだ」

「ほ、本当？　先生もそう思うでしょ!?」

「そうは思うがお前、やりすぎなんだよ」

なるべく平淡に突き放すよう言葉を投げ付ける。　九重が息を飲む音が微かに聞こえた。

これが、今の俺に出来る一番まともな正々法、雪ノ下さんの十八番、論破である。こんなのアイツにバレたら殺される自信があるな。　ネガティブな自信ってなんだよ。

出来ればバレた時の対処法も考えたいが、雪の女王に勝てる程の氷結使いを俺は他に知らないし、エルサなら対当に立てそうだな、氷輪丸は無理そうだ。

「お前が中村先生へやり返したように、今度はお前が中村先生にやり返されるのを考えなかったのか？　今、相手の状態を知らんから呑気に構えているけど相当精神的苦痛を受けたに違いない、下手すりゃ何しでかすかわからないんだぞ」

追い込まれた人間はマジで危ないからな。　…色々諦めた俺が言うのも説得力ないけど。

「だって、美々ちゃんは苦しい思いをしたのに中村は普通に生活していたんだよ！　悔しくて仕方なかったのに、先生は何もするなって言うの!?」

「そう言ってるつもりだけど、わかりにくかったか？　だから子供なんだよな」

「……」

ヤバい、泣きそう。　八幡も泣きそう。

流石、豆腐メンタル。

「それが世の中なんだ。　上の立場の人間にグズとか馬鹿とか使えないとか罵られながも黙って我慢して生きていくのが社会だ。　わかるか？　わからないだろうなぁ、守ってくれる存在がいて守られる立場にいるお前達子供には。　これは黙っているから二度と同じことはするなよ――ゴフゥ!?」

だ、大事なところを蹴りやがった…！　痛い、俺が言い過ぎたのが悪いってわかっているけどこれはキツい！

「先生、最低…！」

もう何回も聞き慣れた言葉である。　だが、これで少しは九重も危ない橋を渡ることはないと思いたい。

先生らしいやり方ではなかったが、仕方ない。　これしか知らないのだ。
「でも、これだけじゃ何の解決にならないよな」
なら、今度は先生らしいことをしよう。

ぼっちのじかん　後編

「イジメられる側にも問題があるんじゃないのか？」

バカの一つ覚えみたいなことを言うな、俺に何の問題があったんだ。　俺はただ、あの子に言っただけなんだ、好きだって。

無い勇気を振り絞り、一世一代、産まれて初めての真剣で甘酸っぱい告白をしただけなんだ。　別にフラれるくらいなら構わなかった、自分の中でも悲しみと同時にスッキリとした憑き物が落ちた気が沸き起こり、これが大人になっていくことなんだと理解出来たからだ。

だが、どうして。　どうして誰もほっといてくれない、どうして余計に掘り返す。

俺にとっては終わったことなのに何故。　何故こんな目に遭わなければならない。

イジメられる側の問題だと？　人を好きになった行為になんの問題がある？

お前達大人はいつも言ってるじゃないか、人に愛情を持って接しましょうと。　人が人を好きになって何が悪いッ！　こんな想いをするくらいなら、もう誰も好きにならない。

大人は卑怯だ、誰一人信じられない。

信じてなるものか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

現在時刻、午後5時半前。　降り頻る雨の中を歩きながら辿り着いたのは、一軒の民家。

表札に宇佐と書かれたその家に訪れた俺は、震える手で呼び鈴を押した。　出てくるのは四十代半ばの女性、宇佐……美々の母親だろう、新しく赴任してきた教師であると軽く自己紹介と突然の訪問に謝罪を加えて、今回訪れた用件を伝える。

無論、宇佐の不登校についてだ。　母親は家にいれた後、自分の娘を呼ぼうとするが俺がそれを止めて出来れば二人っきりで話したいと言う。

よーし、ここまでは平塚先生の指示通りに上手くいった。　…だが、問題はこのあとである。

あの人家庭訪問のやり方教えてくれたけど、生徒に対して何を言って良いのかは教えてくれなかった。　君ならわかるって…貴女は俺ですか？

控えめにノックでドアを叩き、返事を待つが返してこない。　あれれ？　無視されてる？

とりあえずこのまま待っていてもいけないと思い、ゆっくりと開けると…いるじゃん！　普通に部屋に真ん中にちょこんって！　うつむき加減に正座してるじゃん！

度が強そうな眼鏡をかけており、九重みたいにフワフワした長い髪で二つ結びにしている。　違いといえば三つ編みで若干天然パーマがかかっているとこか。　身長は恐らくクラスの中でもトップに位置する程成長しており、全体的に大人っぽいがその表情は怯える子供そのものである。

ええい、大丈夫だ俺の硝子ハート、無視なんて今まで何回も味わってきたじゃないか。

それによく見ろ、宇佐の手には携帯が握られている、しかも震えながら。

中村に酷いことをされた恐怖が甦っているのか、いざという時は九重達に助けを求めようと思っているに違いない。　…全く、羨ましい限りだ。

さて、何から話したら良いことか。

「は、初めまして、新しく君の先生になった、比企谷八幡だ。　よろしく、な？」

何故だろう、なんか納得いかない。　いや、自己紹介は大切だけどもっと言わなきゃいけないことがある、はず…。

「成績は優秀だって聞いたぞ、オール５とかスゲェな！」

やっぱ違う、こんなことじゃない。　言わなきゃいけないこと、彼女が言われたいことを、言ってあげなきゃ…。

俺は、なんて言われたかったのだろう。　学校でイジメられて登校するのが嫌で嫌で仕方なかった時、何をしてほしかった？

「――――九重から聞いた。　お前が中村先生にイジメを受けたことを」

話しを聞いている様子がなかった宇佐に初めて反応が見られる。　ビクリと肩を揺らし、少しずつ嗚咽が聞こえてきた。

「…信じて、くれるんですか？」

「え？」

「お母さんに言っても、校長先生に言っても、信じてくれなくて…わ、私が悪いんじゃないかって…」

確かに、イジメにはイジメられる側にも問題があると言われるが、それは人間の本質を理解していない奴らが簡単に言う言葉だ。　誰だってイジメられたくない、友達と仲良くしたい、そう思っている。

だから人は良い人でいようとする、人から離れたくないがために。　それでも尚イジメが起こるのは、あいつが気に入らないことをしたとか、そりが合わなくて仲が良くないからとか、そんな本人に悪気は無いのに思想が違うという理由で発生するのだ。

果たしてそれでもイジメられる側が悪いと言えるのか？　答えは否、そんなもんは己の度量の狭さを言い訳に、見て見ぬフリをしている本当の悪だ。

「信じるよ」
「…本当に？」
俺は信じない。　こんなに小さな体を一生懸命震わせながら、大粒の涙を流している女の子に、お前が悪いんじゃないのかと平気に言える奴らの言葉なんて、俺は絶対に信じない。
「信じる」
「ひぐっ……えぐっ……！」
「…もう、お前を傷つける中村はいない。　落ち着いたら学校来いよ、宇佐は一人じゃないんだから」
それは、俺が幼い頃、言われたかった言葉だった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

次の朝。　驚いたことに登校してくる生徒達の中に宇佐の姿が見えた。
九重や鑑と交じって、笑顔の彼女を見ると……リア充、末永く爆発しろと思う。
もしかしたら、俺が想像していたよりもあの子はずっと強いかもしれない。
ま、子供なんてー、単純だしー、別に気にしてなんかないんだけどねー。

「……」

ん、なんですか九重さん、ジーっとこっちを見て。　やらしいことなんて考えてないからな！

「あ、おはよう先生！」

「おおおおはよう宇佐。　来れたんだな、偉いぞ」

「何キョドってんの、キモッ」

鑑、お前は黙れ。

「先生あのね、私…先生がお兄ちゃんだったら良かったなぁって思っていたんだ」

「なん……だと……!?」

宇佐から突然のお兄ちゃん発言。　素晴らしい、思わず思考がストロベリーみたいに停止してしまったではないか、寧ろ言って良いぞー。

比企谷お兄ちゃんとか八幡お兄ちゃんとか先生兄ちゃんとか、間違ってもゴミいちゃんは無しな、実妹が懐かしくて会いたくなるから。

「うへぇ…だってコイツ、ゾンビみたいだよ。　吐き気がする！」

だから黙れって言ってんだろうがチビ。　それとお前か、俺をゾンビって言った奴！

此方にあっかんべーを向けながら宇佐の手を引き、校舎へと入って行った鏡。　九重だけは後で向かうと伝えて残る。

うわぁ、絶対何か言うつもりだよこの子。　怖いよー恐ろしいよー小町助けてー。
「美々ちゃんに何を言ったの？」
「フツーに学校来いって言っただけなんだが…」
要は中村がいなければ良かったんだ。　辞職した段階で既に問題は解決されており、後は宇佐の背中を押すだけ、本当に簡単な仕事である。
まぁ、それだけの理由じゃなければまだ難しいんだがな、例えば中村にイジメられる前からクラスにそういった傾向があるなど。　…単に宇佐から中村へターゲットが移っただけだったとか。　あるだろうなぁ、きっとあるだろうなぁ、絶対ある。
「そう」
なんとも冷たい一言だ。　九重は聞きたいことだけ聞いてさっさと踵を返す。
今のような、とてもガキとは思えない達観している時もあれば、初日に俺をからかった無邪気な面を見せる。　友達を思いやる優しさもあれば、恐ろしい残忍さで大人を陥れる狡猾さも持つ。
あれが九重りんという人間の本質なのだろうか。　俺の知る悪と善をストレートに合わせ持ち、変に隠そうとしないあたり素直と感じてしまい、ぶっちゃけ……嫌いじゃない。
まぁ、もう少しで教師を辞めようと考えている今となっては、どうでもいいことであ

るが。

……とか思っていた次期が私にもあったんですよ！

それから一週間、ここ一週間の話しだ。　新たなイジメのターゲットが生まれたのである。

その子は上履きに葉っぱを入れられ、椅子にボンドを塗られ、立ち上がった瞬間にスカートが脱げたり、水風船をわざとぶつけられ、ずぶ濡れになったりと散々な目にあっていた。　イジメていた奴がイジメられる側になるのはわかっていたが、実際にあの恐ろしい〝九重〟がイジメられるとはなぁ。

流石さ○なクンやでぇ、彼の言う通りになるとは…。

新たな問題がこうも早く出来ると、残念ながら辞めようにも辞められない。　幸いにも宇佐や鑑が味方でアイツが不登校になるようなことはなく、九重自身そこまで気にしている様子はないが、一応本人に直接は聞いてみた。

「お前、どうすんの」

「別に。　こうなることはわかっていたし、美々ちゃんには被害がないから良いんじゃない？」

お前には被害が出てるだろ。
「つってもなぁ、ほったらかしにしていると後々面倒なんだよ。　主に俺が」
「あはは、先生ってひねくれているのに正直だね！」
９０度の捻りも２回あれば真っ直ぐだしな。　座布団一枚！
「大丈夫よ先生。　これは私への罰なんだから」
「……」
罰ね、まさかお前、中村のことを後悔しているのか。　微笑みながら言われると、こちらとしては言葉に詰まる。　斜に構えるには早すぎなんだよ、可愛げがねぇ。　つか罰とかなんだよ、ドＭか。
これ以上九重と語ることは無くなったが、数日後、今度は彼女とは別の子達が職員室に待機していた俺のもとへとやってきたのである。　九重の唯一味方である宇佐と鑑だ。
「えぇー、このゾンビに頼むのぉ？」
「で、でも…他に頼れる人いないし…。　これでも先生だから…」
鑑、ゾンビは止めろ。　それと宇佐さん？　貴女これでもってなんですか？
鑑より破壊力あるんですけど、意外と黒い発言しますね。
「お前らの頼み事は九重のことだろ」

「なんだ、気付いていたんなら早くなんとかしてよ！」
むきー！　本当に可愛くねぇなぁ、お前！
「俺だって色々考えていたんだ、でも教材やら宿題とかの準備があったからな。　良い案を思い付くのに時間がかかった」
家に帰っても明日の授業の準備で時間が潰れる。　ろくに頭を回す余裕は少なかった。
「え、それじゃあ良い方法があるの!?」
「勿論だ、最高に効率が良い。　だが、この作戦を実行するには3つの条件がある」
「条件？」
「1つは俺のやることには絶対口を出さないこと」
余計なことをされて作戦が失敗されてはもともこもない、これは俺独断であるからこそ効果を発揮する、俺十八番だ。
「2つ目は九重には何も言わないこと」
これは1つ目の条件に近いな、アイツは妙に鋭いところがあるし、作戦を妨害させられる可能性がある。
「そして、3つ目。　これは特に重要だ」
俺が周りに聞こえないよう声を小さく、低く抑えたことで宇佐と鑑はゴクリと喉を鳴

らす。　心なしか額には汗が見えた。
「宇佐、お前は1日1回必ず俺をお兄ちゃんと呼ぶんだ」
「え…」
「キモッ！　キモッキモッ！　マジキモい！」
「バッてめっ、ちょっ、鑑！　声が大きい！　静かにしろ！」
ほら、白井先生がメッチャ睨んでる！　怖い！
「美々ちゃんに何言わせてんのよ！　前々からキモいと思っていたけど本当にキモいわ！」
「これは所謂取引だ。　俺の働きに対し、お前達は代価を払う必要がある！」
ただ働きなんて死んでもごめんだ。
「お前達――――まさか私にも言わせる気!?」
「安心しろ、鑑のはいらん」
「それはそれで腹立つ！」
「私、良いよ…」
「み、美々ちゃん!?」
ほっほっほ、お主はわかってくれるか美々よ。　ふひひ、素直な娘は好きじゃぞー。
「じゃ、じゃあ…おねがいします、お兄…ちゃん」

「もうちょっと、怒っているような感じで」
「もう、おねがいね！　お兄ちゃん！」
「今度はセクシーに」
「お兄、ちゃん…おね…がい…！」
「3度も言わせてんじゃねぇえええ!!」
いかん、意外とノリが良い宇佐のおかげで調子に乗ってしまった。　だが、冗談抜きで最初の2つさえクリア出来ていれば、この依頼既に達成されたも同然。
手段は俺の得意分野だ、ハッキリ言って宇佐の家に行った時より楽勝。　決行は明日、この一日に全てを賭ける。
見せてやるぜ本当の〝敗者〟ってのがどんなもんかな。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

三日後。　教室にある自分の教卓の引き出しを開けた俺は、己の敗北……いや、勝利……いやどっちだ？　とにかく、宇佐達の依頼、九重の救出を完了させたことを確信した。
俺の教材には馬鹿、死ね、学校辞めろ、と無惨に落書きされた跡が…。　八幡悲しく

ないもん。

朝の会を開いてもクラスのみんなは大人しく聞いている様子はなく、騒いでいる様子もない。　異質な空気、宇佐と鑑と九重以外の生徒全員が俺に対して敵意を剥き出しにして睨み付けている。

「出席を取るぞ、相田」

「……」

返事はないがいるな。

「飯塚」

「……」

はいはい、丸っと。

「宇佐美々」

「は、はい！」

ここ暫く出席簿に丸が続くところを見ると、これが中々嬉しいもんだ。

「鑑黒」

「へーい」

「へいじゃない、はいだろ」

「はいはい、うるさいなー」

はいは1回で御願いします。
「九重りん」
「――はい」
妙な間があった気がしたが無視だ、無視。　続けて別の生徒の出席を取っていくと、不意にどこからかこんな声が聞こえてきた。
「マジ比企谷うぜぇ…」
「あいつ、中村が何されたか知ってんのに…自分は大丈夫と思ったんじゃね？」
「いつもイミフなことしか言わねぇし、わかってないでしょ」
俺にギリギリ聞こえる音量の陰口。　わざとだな。
宇佐の依頼をクリアするために俺のとった行動は、至ってシンプル。　中村と全く同じことをしただけだ。
彼方が悪業を犯したことでこのクラスは一致団結（笑）し、大義名分のもと正義の鉄槌を下していたが、その対象者がいなくなったので新たなターゲットとして恐らく主犯核の九重が選ばれたのだろう。　あの子はやり過ぎた、だから悪い子だ、アイツは悪い奴だ、次に罰を受けるべきはアイツだと。
そして俺が九重を相手に、宇佐が中村にやられたことをしただけでご覧の有り様。あっという間に生徒達は九重の味方となり、俺は悪の親玉となった。

まさに人間の闇、いや…生物としての闇か。　さ○なクンだって言っていた。
イジメられていたメダカを他の水槽に移しても、また別のメダカがイジメられるだけだと。
ああ、ならば私は貝になりたい。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

放課後、体育館の裏で鏡と宇佐に呼び出された。　てっきりボコられんのかと思ったが宇佐が泣きそうで、鏡は苦い表情をしていたため違うことに気付く。
「やっぱり止めよう、先生。　私、先生が悪くないのにイジメられてるとこ見たくないよ…！」
「オイオイ、それじゃあ意味ないだろ。　九重がまたイジメられたらどうする」
「美々ちゃんが言いたいのはそんなことじゃない！　アンタ、大人で教師のくせになんでこんな頭悪いやり方しか思いつかないのよ！」
「頭悪いとは心外だな。　これが一番効率良いだろ」
「ア・ン・タにとってはね！　でも事情を知ってる此方からすればイライラするの！」
だから言ったのに、俺が何をしようと口を出すなって。　約束とか完全に無意味であ

る。

「あーもう！　思い出したら腹立ってきた！　アイツらボコボコにしてやる！」

「ちょっと待てって。　お前が暴れると俺にとばっちりがくる、だいたいお前もアイツらと同じだろ」

主犯である九重の親友で宇佐の友達だ。　性格もキツい鏡が中村イジメをやらないわけがない。

であれば、同じことをした鏡がアイツらの行動に反感を持つこと自体、あってはならないのだ。

「だから何」

「え、いや…だから鏡にそんな資格ないだろ？」

あれ、動揺している様子がない。　なんでそんなに堂々してるの？

「資格とか意味わかんないんだけど。　私は私のやりたいようにやるだけよ！　許さないと思ったら許さないし、例え自分が同じことをしていても、だから何よ！」

えー!?　理不尽すぎるだろ！

反抗的すぎるというか、鏡さん独善すぐる。　大人の都合とか理屈とか全然通じない。

「アンタは本当の意味で美々ちゃんを助けてくれたわ。　だからこそ頼んだのに、何

よこの結果！　ホント使えないわ、このゾンビ！　アホ童貞！」
酷い、あんまりだ。　八幡のライフはとっくにゼロよ！
「このまま学校辞めないの！」
「はぁ!?　辞めたら生活出来ねぇだろうが」
まだヒモ相手も見つかっていないのに路頭に迷うわ。　鏡は俺を精神的だけでなく、肉体的にも殺す気か。
「中村は辞めた、アンタも辞めたら楽じゃない！」
楽ね……ああ、なるほど。　鏡は、この子は俺を助けようとしているのか。
喋りはかなりキツい子だけど、よく考えてみれば九重がイジメられていた時もこの子はクラスのわだかまりなんて気にしないで、常に九重の味方だった。
皮の面が厚いというか、本当はそういう子なんだろう、凄いツンデレだ。
「それともなに?　辞めたら逃げたと思われるから?　本っ当、無駄にプライド高くしてるとキモいんですけど」
「別に逃げることは悪いことじゃないだろ。　宇佐は自分を守るために学校から家に逃げたわけだし、それは臆病者じゃなくて勝者なんじゃねぇの」
「私が勝者、ですか…?」
「おう。　自分を守れたんだから宇佐の勝ち」

本当の敗者は己の立場を変える勇気もなく、ただズルズルと引きずり、そして堕ち続ける奴だ。　そんな奴の末路は、完全に俺である。

「じゃあ、ゾンビ。　アンタも逃げなさいよ…」

「ゾンビ言うな。　まぁ、俺も最初は適当なとこで退場しようかと考えていたんだがな…」

思い出されるのは九重の言葉。　自分は悪いことをしたのだから罰を受けるべきだと。

大人のように達観、いや諦観か。　子供のくせに高二病なんて十年早いんだよ、それは俺の特権だ。

「やっぱこれが一番効率良いだろ？　生徒同士の信頼関係（笑）も築けるし、何より負けることに関しては、俺が最強！　唯一の俺ＴＵＥＥＥＥＥを邪魔されてたまるか」

「馬っ鹿みたい」

その時、俺や鏡、宇佐とは違う別の人間の声が聞こえた。　え、まさか…。

「こ、九重…」

猫みたいな大きな目で此方を威圧する九重さん。　雪ノ下さんとほぼ互角を持つ冷たい雰囲気は、俺達全員の空気を凍り付かせた。　ご本人登場とかモノマネ歌合戦かよ！

「……」
うわぁ、黙りだ。　何がくるかわからない一番怖いパターン。
「先生、友達いないでしょ」
いきなりエグいのきたな！　しかも全然関係ない話し！
「いつも黒ちゃんと美々ちゃんと一緒にいる私が、二人の怪しい行動に気づかないわけがない。　あとをつけられるって考えなかったの？」
ぐっ、確かに仰る通り。　友達いないからそんなこと全く考えられなかったわ。
「おのれ。　貴様ら、つけられたな…！」
「アンタが悪いんじゃない！　全部アンタが悪い！」
くそ、鏡め！　理不尽なのに何故か納得してしまう自分がいる。　兎に角、九重をどうやって言いくるめれば良いか考えないと。
「九重、このことは…」
「嫌よ。　これ以上先生に勝手なことをされるのは御免だわ」
とは言っても、もう手遅れだけどな。　この状況をすぐにひっくり返すなんて難しい、フハハ俺の勝ち越しは揺るがない。
「いくよ、美々ちゃん、黒ちゃん。　私を本気にさせたらどうなるか、先生に教えてやる」

しかし、九重りんはやけに落ち着いている。　先に帰ろうとした彼女を鏡と宇佐は泣きべそかきながら、置いてかないで！と後に続く。

な、何。　なんなの…滅茶苦茶怖ぇよあの子、実は一番敵に回しちゃいけないヤツに宣戦布告されたんじゃね？

ていうか、なんで俺が敵意向けられてんだよ。　普通逆だろ、感謝されるだろ。

今まで感じたことのない意味不明な怒りに困惑。　恐怖で身体を震わせながら午後の授業に入った。

「いいか、ここの式はだな――――」

俺の解説に耳を貸さない3―1。　皆さん、ワイワイガヤガヤとお喋りしたり、ゲームをしたり、漫画読んだり、俺のことは全く無視だ。

完全に舐められている。　舐められんの慣れてるから良いが、流石にこの状況はいかんな、算数なんかは遅れると取り戻すのも大変だろうし、さて…どうしたものか。

なんとかしようと知恵を捻っていた、その時だった。

ダンッ！と、生徒達の雑音さえかき消す程、大きな物音がしたのだ。　一気にクラスがシンっと静まりかえり、みんなが何事かと見れば、自分の机を思いっきり蹴り飛ばした九重が、クラス中を冷たい眼差しで睨み付けていたのである。　周りポカン、勿論俺もポカン。

気づけば生徒達は黙り込んで、此方に向かってノートを取っている。　これはまさかと九重をチラリと見たら、案の定コイツ……俺に向かって笑顔でウインクを投げてきた。　おいおい。

これにより最後までスムーズに授業は進み、次の授業も九重が俺を罵倒して皆の同情を俺に向けさせることで進行の阻害を防いだのだ。　間違いない、九重は俺と全く同じことをしようとしている。

俺の敵意をまた自分に向けさせていた。　此方の苦労が水の泡じゃねぇか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

放課後、職員室に戻った俺は一つのことに頭を悩ませた。　九重りん、アイツのことが全くわからない。

普段は他の生徒と同等、無邪気で明るい。　だが、時折見せる何処か世の中を斜めに見た達観した様子があり、冷静沈着、更に知恵が回り、それでいて大人を陥れる残忍さを持っている。

俺の知り合いで一番近いと思うのは、一色か？　いや、違うな。

全ての人物に当てはまるのだ。　由比ヶ浜のような明るさ、あーしさんのような唯我

独尊ぶり、川崎のように斜に構え、小町や一色みたいに甘え上手であざとい、雪ノ下のように冷静沈着で知恵が回り、平塚先生並みの手の速さ、そして雪ノ下姉のような残忍さを持つ。　うわー、ナニコレ怖い。

全部合わさって無敵じゃねぇか、海老名さん助けて…。

「ゾンビ大変！　りんちゃんが！」

鏡ー！　お前は職員室に来るなり、ゾンビ呼ばわり止めろー！

青木先生がは？って顔した後、あぁって納得してる。　色々許せんが、先ずはお前を許せん！

「ふざけてる場合じゃないんだって！　りんちゃん助けてよ！」

…どうやらマジでヤバいらしい。　アイツ、今度は何やらかした。

鏡に連れられる形で現場に向かうと、体育館の裏で宇佐が上に向きながら危ないよ！と叫んでいた。　嫌な予感がして仰ぎ見ると、九重が１０メートルはあろうかという大きな木の上によじ登っていたのである。

アイツ何やってんだよ…！　背筋がゾッと寒くなったが、改めて状況整理した。

九重の見つめる先には体育館の裏で飼っていたニャーがジッと動けない様子で固まっており、つまりはこうか、あの猫を助けるためにわざわざ登ったといったところか。

いつも冷静沈着はどうしたんだ、普通に考えて危ねぇのに！

「比企谷先生。　俺、脚立持ってきます！」
青木先生が急いで走る。　その間にも九重がしがみついている枝はミシミシと音を発て今にも折れそうだ。
なのにアイツはそんなこと気にも止めないで、枝の先にいるニャーに近づこうとする。
「バカ！　動くな！」
「でも、助けないと……！」
九重は此方の言うことを聞かない。　何故そこまで必死になる。
「〝この子〟、みんなにずっとイジメられて…。　信じられなくなってるから助けないと…！　優しい人間もいるんだって！」
泣きそうな九重の言葉に俺の思考が止まった。　なら、お前が宇佐を助けたのは、俺を助けようとしたのは、そのためだったのか？
彼女の手がニャーに届こうとした瞬間、バキリと最悪の音が鳴る。　枝が折れ、ニャーと共に落下した九重はすぐにニャーを捕まえ、その胸に抱き締めた。
俺は考えるより先に動く。　最近運動してなかったせいか身体少々重たかったが、受け止めるまでにはなんとか間に合った。
ギリギリでキャッチ出来たが、九重の肘が俺の土手っ腹に直撃し、視界がブラックア

ウト。　うわ、こんなんで気絶とか最後までカッコつかない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

気絶して保健室に運ばれた比企谷先生。　長くて軟らかそうなまつ毛に、私の指が触れる。

むず痒そうに、イヤイヤと無意識に指から逃げようとした比企谷先生は妙に可愛い。

もっと意地悪したくなる。

「りんちゃん、私ね、比企谷先生なら信じられる。　だって、信じるって言ったから。

それに、言った時の先生が泣きそうだったから…」

「うん」

知ってた。　だって、先生嘘つかないもん。

自分が嘘つきで卑怯だって、正直に言ってくれる。　まるで猫みたいな人。

私に対して急に冷たく当たり出したのも、なにかあるってすぐに気づいた。

「りんちゃん、そろそろ帰らないとレイジさん心配するよ。　看病は青木先生がしてくれるって」

「わかった。　美々ちゃん先に戻っていいよ、私はすぐに行くから」

ランドセルを背負い、退出する。　私はそれを確認してから先生の顔に近寄った。
こうして目を閉じていると、改めて比企谷先生が結構なイケメンだと実感する。　意外な美形に黒ちゃんも絶句して逃げ出したのは驚いた。
「先生、色々ありがとう。　ご褒美あげるね」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

真っ白い意識の世界。　何かが刹那に浮かび上がって、何かが一瞬で消えるそんな世界。
俺の嫌な思い出、トラウマが現れるが、すぐに消滅し、最終的に現れたのは九重の泣きそうな言葉だった。
ああ、そうか。　九重も信じられなかったのだ、大人を。
もし、俺が小学生の時、コイツと出逢っていれば一体どんな人生を送ったのだろう。
『え、先生がそんなこと言ったの!?　うわ、ホンっト最低』
『ちょっとアンタ達!・　告白したこともないヘタレのくせに適当なこと言ってんじゃない!』

『マジであの子に告白したの？　止めといた方が良いって、絶対将来ヤリマンだから。数年にはア〇コ真っ黒よ』
『アハハ！　大丈夫だって！　そのうち比企谷にもピッタリな彼女出来るからさ！』
『ほら、行こう！　比企谷！』
明るくて我が儘で、誰にも怖じけづかないで、でも大人ッぽい冷静沈着な性格で残忍、だけど本当はとても優しい女の子。　最高だな、お前。　生まれるの、遅すぎ。
「――――先生。　先生は私が初めて信じられた大人なんだよ」
ふと、目を覚ました。　知らない天井でベットに横たわる俺。
此処は保健室か？　周りには誰もいないので、看病とか一切されなかったようだ、クソ。
つーか唇がデローンと濡れてる。　涎溢しすぎだろ、寧ろこれは見られなくてラッキーと思うべきか。
手で拭うと微かに甘い香りがした。
「あ、比企谷先生。　目を覚ましたんですね」
青木先生がやってきて保健室の窓を開けながら此方へ近寄る。　なんで男なんだよ、宝院先生呼んでこい。
「九重は？」

「あの子なら貴方のおかげで無事ですよ。　ほら」
窓から指を指す。　見れば校門を潜ろうとした鏡黒、宇佐美々、九重りんが笑いながら下校する様子が。
全く、人の気も知らないで呑気なもんだ。
「俺、正直、比企谷先生が羨ましいです」
は？　お前何言ってんの。
「あんなに可愛い生徒達に慕われるなんて、教師の冥利に尽きますよ」
いやいや、アレは天使に見えるけど中身悪魔だから。　鏡や九重もそうだが、最近では宇佐もその傾向があるからね。
ああいう大人しい子がサラリと毒を吐くのは怖い。　ノーガードにダブルクリティカルだからな？
「俺、頼れるお兄さんみたいな先生になりたかったんです。　比企谷先生は同じ時期で新任なのに、もう頼られているじゃないですか。　わざわざ職員室に訪れたり」
「舐められているだけですよ」
ホント、糞生意気な程に。　別の窓に映った俺の顔がチラリと見える、不思議なことに口角が僅かに上がっていた。
次の日の朝。　当校してくる生徒達の中に、何時もの三人組が現れる。

「あ！　せんせー！」
「は？」
九重は俺を見つけた瞬間、パァっと顔を輝かせて走り出すと、勢い良く飛び付いてきた。　突然のことに反応出来ない此方は素直に受け止めるしかない。
「えへへ！　おはよー！」
「お、おい離れろ…」
周りの先生とか生徒とかメッチャ見てる、ヤバいヤバい。　俺がロリコン扱いされるようになったらどうするつもりだ。
「比企谷先生、私考えたんだ！」
無視か。
「先生が私をイジメてみんなに嫌われるでしょ、そしたら今度は私が先生をイジメてみんなから嫌われるの！　これを繰り返していたら良いと思わない？」
「何言ってんだよ」
それは昨日、九重がやっていたことだ。　しかしその行為は問題の解決にならず、ましてや解消にもならない、ただの停滞、ズルズルと負け続ける最悪のやり方だ。
だが、この子は何を言ってもやるだろう。　そういう子だというのは痛い程理解した。

「りんちゃんばっちい！　比企谷から離れないと！」
鏡が怒りながら宇佐と共に此方へ走ってくる。　本当にお前は俺を嫌いすぎるな。
しかし、まぁ…これで良かったのかもしれない。　あのままだと絶対に辞めていた教師、別に楽しいとか遣り甲斐を見出だしたとか、そんなプラス面な理由ではないにしろ、辞める気力もないし、何より辞められない訳が出来た。
相も変わらずぼっちで誰かからイジメられる日常。　子供の頃から何一つ成長していない俺の生き方。
生きているのか死んでいるのかわからない、ゾンビのような人生。　嘘でまみれた汚い世界を見続けることになるだろうが、その褒美がこの甘い香りなら、充分だ。　これからも俺にはこれで、充分だ。
「先生、大好き！」
――そして比企谷八幡は、再びぼっちのじかんを歩む。
ＥＮＤ

ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】

懺悔。　それは相手に対して己の犯した罪を告白する行為。　大半、特に宗教が根強い地域や国では神に対して行い、自らの罪を赦され、或いは一人で背負い込まず分け与えることで罪の苦痛から逃れようとするのだ。　話すだけでも楽になることがあるよ！みたいな。

無論、俺自身も懺悔は行う。しかし、無神論者である俺。　神に対してどころか、恋人や友人さえもいないぼっちでは、懺悔を行う相手は必然的に限られる。

だが、妹の小町に対して懺悔をしたところでどうなるか。　ゴミを見るような目と共に侮蔑が飛んで、苦痛から逃れるどころか深く傷つけられるだけだ。

故に、ぼっちである俺が懺悔を行う相手は俺自身。　この比企谷八幡をおいて、他にはいない。

過去における、失敗、過ち、そして黒歴史。　俺……いや、私が赦そう。お前は悪くない、だって私なのだから。　私は私を赦す。　何故なら私は俺だから。　俺は私に優しい。　我想う、故に我あり。

おお、やはり俺は新世界の神だったようだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「相田」
「……」
「飯塚」
「……」

あれから1週間が経った。別段俺の状況は改善されてはいない。相変わらず生徒達からは無視され、教師としての威厳もへったくれもない。しかし、俺にとっては昔から馴染んだ物であるためそこまで苦痛ではない。寧ろ、個人的に一番キツイのはコイツだ。

「九重」
「はぁーいっ！」

満面の笑顔で力強く挙手をする女の子。二つに結ったボリュームのある髪が大きく揺れる。猫みたいな雰囲気を纏う、無邪気でませていて、そして恐ろしい女の子。九重りん。

宇佐はだいぶ打ち解けてきたが、この子に関しては異常に俺へ対しなついている。授

業態度は勿論、休み時間になればすぐさま抱き付いて過剰なスキンシップや、過激な質疑応答を行う。

主に俺のアレに手を伸ばしたり、胸板を擦ったり、経験はあるのかと、セクハラまがいなことばかり。因みに鏡黒は論外である。アイツは他の生徒達と違い俺に対して明確な敵意を向ける。恐らく九重を盗られたと勘違いしているに違いない、引っ掻き傷が痛むな。

「この前渡した宿題、将来の夢について書いてきた作文用紙を提出してください」

皆、無言ながら鞄から作文用紙を取りだし、後ろの生徒から順に、まとめて回されてくる。クラスでの立場が孤立しているが、最低限のことは成してくるのはきっと、九重のおかげだろう。元々リーダーシップのある子だから強く出られると他の生徒達は渋々従うことがある。…その内、何か礼をしてやらんとな。いや…講義で聞いたが、あまりこういうのは、良くなかったような気もする。えこひいきとか思われるとか、なんとか言っていたような。

「先生ー！　私の将来の夢聞いて聞いて！」

「別にやらんでいい。帰ってからチェックするから…」

「私の将来の夢は――――」

聞いちゃいねぇ。

「せんせーの、お嫁さんになることでーすっ！」
「ぶほぉ!?」
コイツはまたそんなことを。しかもクラス中に大声で宣言するなんて、何考えてやがる。周りが白い目で見てるぞ。
「今すぐ消せすぐ変えろ……！」
「いやーん、先生近いー！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

午後8時すぎ、漸く帰宅である。青木から飲みに誘われたが、丁重にお断りした。残念そうな顔が今でも浮かぶ、最近やたら俺に構うな、アイツ。別に嫌いではないが、どうにもあの熱い、もとい熱苦しい元気いっぱいな態度と空回りしている感じがどうにも苦手だ。シミ一つ残さずに洗い、柔軟剤をたっぷり効かせた綺麗な材木座といった感覚が一番近いと思う。眼鏡だし。
独り暮らしのアパートには出迎える者は誰もいない。ベッド、棚、テーブル、パソコン、必要最低限しか置かれていない部屋はやたら寂しい。最近はテレビも全く見ないし。

フローリングの床に腰を降ろし、鞄から回収した作文用紙を取り出す。誤字脱字、または問題ない表現がないかチェックする必要がある。職員室でやれば集中力が増し捗るが、残業が死ぬほど嫌な俺は、残りの仕事は全て自宅で片付けていた。

けして白井先生のプレッシャーが怖いとかそんな物ではない。ええ、そうですとも。仮に半分学級崩壊を起こしかけていて怒りを買っているとかそんな物ではない。ないったらない。

そういえばあの人も眼鏡だった。なるほど、眼鏡は俺の天敵だったのか。海老名さんも眼鏡だし。

作文用紙に目を通していくと、これが酷い酷い。全員適当だ。石油王やお金持ちや大統領など。夢の無い内容ばかりである。いやまぁ…あの様子だと納得の物だがな。しかも俺が言えた立場でもない、専業主夫など石油王や大統領よりも夢がない。

しっかしまた…特に鏡のは意味不明だわな。

『私の夢は邪魔でキモい、エセイケメンゾンビを地獄へ落とすことです』

「何書いてんだ」

汚ならしい字から悪意が滲み出ているのは何故だろう。

それに比べ、宇佐のは小学生の女の子らしい心暖まる内容だ。

『私の夢は動物のお医者さんです。苦しんでいる動物を助けて仲良くしていきたいで

す』

流石は俺が見定めた第二の妹。ぐうかわすぎる天使。同じ眼鏡属性とは思えん、もしかしたらあの子は人間ではないのかもしれない。

「最後は九重か…」

一応書き直させたが、不安ばかりが押し寄せる。

『私の将来の夢は、裸エプロンで先生の帰りを迎えて、ごはんにする？　お風呂にする？　それとも、わ・た・し？　をすることです！　それで先生が私を選んで――――』

「もう、寝よう」

南無阿弥陀仏。悪霊退散。脳内に浮かんだイメージを振り払う。色々な意味でこれはキツイ。比企谷八幡は考えるのを止めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

早天。微かに明るくなり始めた時間、生徒達が登校する前に学校へ出勤。涼しげな空気が立ち込める中、俺は嫌々ながら早めのお仕事である。もう少しゆっくりと出勤したいが、残念ながら九重に捕まると今朝から周りの大人達から怪しげな目を向けられるのだから仕方ない。

アイツ、俺の出勤時間に合わせて登校するのだ。朝早くから学校に来たとしても、鏡も宇佐もいないからつまらないと思うのだが。

ここ三日連続は出勤時間を変えて、かち合わないようにしている。

視界に写る校門。自然と足取りは重い。しかして、校門前に目の上のたんこぶが現れるまでは、その足取りはまだマシな方であっただろう。

「ん？」

身長からして九重ではない。明らかな高身長だが、俺よりも低く、また細い。亜麻色のセミロングをしたゆるふわ。そして、壁に背を預け、両手を前にして鞄を持ち、うつむき加減にふぅ…と可愛くため息つきながら〝力無くて重いけど、私しっかり持ってますよ〟アピールしている超絶あざといあの人物。間違いない。

「あっ！　先輩ー！」

「げっ」

見つかってしまった。隠れる前に見つかってしまった。実は最初から見えていてこの距離から気づいたと見せかけるように感じる。高校時代、俺の後輩だった一色いろは。よりにもよって逢いたくない上位に位置するコイツが現れるとは……！

「先輩酷いー！　今、間違いなく嫌な顔しました！」

「…なんで此所にいるんだよ」

「比企谷八幡先輩の愛しい後輩、一色いろは。参上ですっ」
昔懐かしい敬礼と共に近寄るビッチの化身。変わらないな、もう二度と会わないと思っていたのに。
「もーホント疲れました、しかも眠たいです」
「だから聞いてるだろ、なんで来たんだ。こんな朝早くに」
「そんなの、学校の先生なんて似合わないにもほどがある仕事についた先輩を、見に来たに決まってるじゃないですかぁ」
にやけそうな口元を隠しながら更に近寄る一色。近い近い、良い香りが漂ってくる。それは女の子が大人に変化しかけてる、軽い甘さを持ちながら何処か深い匂い。
まさかこれが加齢臭の始まりではないことを願う。
「平塚先生に先輩の学校は聞いたんですけどね、流石に住所までは教えられないと。だから此所でずっと待ち伏せしていたんです」
怖いよぉ。何が怖いって、平塚先生には俺の住所教えた覚えがないのにそれを把握している事実が怖いよぉ。まさかずっとつけられていたのではないかと、胃が縮まる。
「お前暇なんだな。よくやるよ」
「当然ですよー、先輩に嫌がらせ――げふんげふん、会いに来るのは後輩としての特権なんですから！」

おい、今不穏なことが聞こえたぞ。

「先生ー！　見つけたー！」

「マジか…」

背後から聞こえる幼い声、このタイミングか、このタイミングで捕まってしまうのか。

此所には一色がいるというのに…！

振り向けばやはり、駆け足で飛び付いてくる九重が。真っ正面から受け、衝撃を抑えられなかった両者はそのままの勢いでアスファルトに倒れてしまう。背中から倒れてしまったせいで、主に俺へのダメージがデカイ。

「えへへ、やっと捕まえた！」

「ちょっ、先輩大丈夫ですか!?」

肺の中の空気が無くなる、さながらアクション系ラノベ主人公の体験をしてしまう。成る程。確かにこれはなかなか来るな。

「せんぱい？」

「高校の頃の後輩だよ」

九重が不思議そうに一色を見ていたので、補足しておく。スーツに付いた砂汚れを軽く払い起き上がろうとすると、一色は両手を差し出していた。

「あざとい」

「先輩相変わらずですね…」
「特に両手が重要だ、一色的にポイント高い」
「えっ！　それってもしかして、ドキドキしちゃったりしてます？」
「別に、そこまで自意識過剰じゃない」
またしてもニヤニヤ。本当に嫌がらせの為だけに来たんだな、酷い後輩である。
「先生近い！」
「え？」
九重からいきなり引っ張られた。どうやら知らず知らずの内に一色との距離が目と鼻の先だったようだ。そんな敵意に満ちた目で睨むな。
「九重」
名前を呼びながら軽く背中を押して、一色の前に出すがすぐに俺の後ろへ引っ込んでしまう。なんでこんなに大人しいんだ？
「こんにちは、九重ちゃん…だったかな？　いろはって呼んでね」
一色は苦笑いを浮かべながら覗き込む。九重は返事を返さずにただジッと一色を見つめていた。
「へー、先輩って子供に人気あったんですね。誠に遺憾ながら意外です」
「何故意外でキレてんだよ」

「あ、でも留美ちゃんも先輩になついていましたし、そこまで意外じゃないかも…。ハツ、まさかロリコン…！」

「ぼっ…ちげぇよ」

新作ゲームの発売日に徹夜で並ばされたアレを、なついていたとは言わない。良いように利用させられていただけだ。最後は俺を置いてどっかに行きやがった。それより、九重はそんなにおろおろしてどうした。いつもの破天荒が見当たらない。

「一色、お前此所に来たのは良いけど大丈夫なのか」

主に仕事とか、仕事とか…仕事とか――――彼氏とか？　前に彼氏出来たんですよぉ、って自慢のメールが来たのを覚えている。画像を送ってこなかったのでどんな奴かは知らんが、まさか葉山じゃないよな？

「心配してくれるんですか？　ホント先輩って、学生の頃からスキあらば私にフラグを建てようと…」

それはない。っーか、自意識過剰なのはお前じゃねぇか。

「暫く有給取ったんですよ。二日ほど余裕があるので、この辺をうろうろしようかなー、と思って」

「チッ」

「舌打ち!?」

有給とは羨ましい限りだ。…それにしてもこの辺をうろうろって、まさか滞在するつもりじゃないだろうな？

「一応宿泊場所を探していたんですけど…。あ、そうだ！」

「断る」

「ま、まだ何も言ってないじゃないですか!?」

今の思考時間に三秒も掛かってなかった。明らかに予め考えられた〝あ、そうだ！〟だった。しかも人差し指を顎に添えていたというのに、閃いた途端上に掲げるなどあからさますぎて泣ける。もう少し上手く出来ないのか。

「良いじゃないですかぁ、先輩の家に泊まっても！」

「良いわけないだろ。子供がいる」

九重の前で聞かせて良い話しでもない。一色も状況を理解したのか、ばつが悪そうな顔で萎縮する。聞こえないよう今一度近寄り、耳元で小さく囁く。

「それにお前彼氏いるんじゃないのか、しかも俺男だし」

ごく当たり前のこと言っただけなのに、ピタリと固まる一色。

「え、あ…。あぁー、か…彼氏？　ですか？　も、勿論いますよ？　でも、半分終わってるっていうかぁ、いないも同然っていうかぁ」

酷い、酷すぎる。もはや興味を無くしてしまえば、ホンの僅かな望みも叶わぬほど冷

めてしまうらしい。本当にいつか、一色が殺されかねないか心配なんだが。
「先輩はヘタレですから、そういった心配もありませんし」
「そうかい」
「じゃあ良いですよね！」
だからなんでそうなる。そう言おうとしたが、それは第三者の悲痛な声に阻まれてしまう。
「…だめ」
「九重？」
「そんなの絶対だめ！」
幼い猫みたいな目は、どこまでも必死だった。

ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】２

「今日は算数のテストを返します。名前順から取りに来てください」

相田、飯塚と連日の出席を取るような生徒が続き、数日前に行った算数のテストを返却していく。一部を除き、皆、無言で目を合わすことなく、受け取りそして帰る。優等生である宇佐は全ての教科において満点を取っていたが、今回も１００点なのは言うまでもない。

鏡は…とりあえず哀れな目線を送っておこう。

「バレるだろーがっ！」

ちょっと鏡さん？　ぐーは止めて、ぐーは。

鏡は他の生徒達に比べ、算数に対する明らかな成績の違いがある。ここ暫く様子を見て、その原因はハッキリした。この子は別に真面目に授業を受けていないので成績が悪いということではない。宿題も真面目にやってくる（正解が出来ているというわけではない）。

では何故か。

答えは一つ。理解力が足りないのだ。

基本である算数においてその式が〝何が何のために、どのようにして使われるのか〟知らなければならない。様々な比喩や譬え話を織り混ぜて教えていくのだが、鏡はそれが苦手らしい。毎回ポカーンとした顔でとりあえずノートを取っている姿がよく見られる。

そのまま授業を進めても式の使い方がわからない鏡は、当然ながら出来るはずがない。本来なら前任である中村がやるべきだったのだろうが、これは受け継いだ成績表を見て、すぐに気づけなかった俺の責任でもある。

ま、もう解決法はあるんだが、今度の補習をしてやろう。気掛かりは此方の身体が持つかどうか…。

「九重」

「はい」

いつもと違い、静かな声で返事が。うつむき加減に受け取ったテストの点数は１５点。酷い結果だが、九重がそれを見て驚いた様子はない。ただ、ゆっくりと自分の席へと戻る。…鏡もそうだが、まずはコイツから補習が必要か。

「どうしたの、りんちゃん。いつもは算数良いのに…」

「比企谷が担任になってから成績落ちたんじゃないの？」

心配そうな宇佐。そして馬鹿にした鏡がニヤリと此方を見る。あのね鏡さん、貴女の

1年と2年の成績が悪いのは知っているんですよ。

「あはは、ちょっとね…」

九重は今朝の出来事から、いつもの元気を無くしている。困ったような顔は何故か由比ヶ浜の物とよく似ていた。

九重の言葉に驚いた一色は、とりあえず日を改めて出直すと言い、その場から退散してしまった。何度も考えたが、やはり一色が俺の様子を見に来る為だけに此所へ来たとは考えにくい。元々此所へ用がありついでに来たのか、或いは地元千葉から離れなければならない何かがあったのか。

様々な思惑が浮かんだが、一番濃厚な線は殆ど別れかかっている彼氏の存在、何かトラブルがあったのではないかと。

無論、僅かながら〝ただ俺に会いに来た〟という甘い考えもあったが、そういうのはとうの昔に捨て去った〝期待〟である。これまで比企谷八幡という人物において期待という言葉は、真っ先に消さなければならない感情の一つ。

俺が望むことを許されず、俺が望まれることを許されず、ただ無欲に生きた。カースト上位が選ばず、中位が選ばず、下位が選ばず、残った物が最下位である俺の物だ。残り物に福がある、と言われるがそんなものなど無い。手垢にまみれた薄汚い物こそが本当の残り物。それに漸く手を伸ばせるのが俺だ。

だから、一色が何を望もうと俺には関係ない。九重もきっとそうだ。

今は先生先生言ってくれるが、所詮は一年足らずの知人。来年になって、再来年が経って、その頃には比企谷？　誰それ？　…と鏡や宇佐に話す姿が思い浮かぶ。小学生の人生観などそんなもんだ。ソースは俺、小学校頃の先生なんて名前どころか顔すら思い出せないのだから。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ねぇ、せんせ…。りんが手伝おっか…」

資料室から借りてきた大量の教材を段ボールに仕舞っていると、九重がモジモジしながら助力の言葉をかけてくる。大きな二つの髪の毛を顔の前に持ってきて、口元を隠し上目使いで。

あざと可愛い。

計算された一色と違い、素の物だとすぐにわかり、それが更に可愛さを引き立たせる。二つ返事でお願いしたかったが、残念ながら量が量である。幼い女の子が持つには怪我をしかねない重さであるため御断りしておく。

「良い。あとは俺がやるから鏡達と遊んでろ」

「でも…」

怪我したら俺の責任になりかねない。こういう時、常に神経使うから地味にツライ。九重の続く言葉を無視して、教材を抱えたままそそくさと教室から出ていく。あのまま聞いていれば押し切られる可能性がある。

「待って！　一緒に行く！」

ついてきちゃったよ。

「いや…だから良いって」

「ダメ。だって先生を守るのは私の役目だもん」

そういう割には、俺に対するセクハラを止めてくれないよな。九重からしていることであっても、俺のせいにされるから。社会的立場を守ってくれると非常にありがたいんですけど。

この世の中は成人と認められた大人よりも、義務教育を終えていない子供の言葉を信用するように出来ている。人生という荒波に育った人間よりも、衣食住を提供され甘々に育てられたヒモの方をだ。

つまりは必然的に、ヒモという存在は社会で最も信用される人間ということに他ならない。ああ、早くヒモになりたい。ヒモになりたい。

「ねーねー、先生の誕生日っていつ？」

「いきなり話題が変わったな…。なんでまた」
「別に良いじゃん、あと好きな食べ物とか嫌いな食べ物とか」
なに、嫌いな物を送りつける気か？　もしくは好きな食べ物の中に嫌いな物を隠して食べさせる気か。
小さい頃母親がよくやる手だが、あれは殺意湧く。好物を台無しにされたこともそうだが、バレないと信じて食べさせようとする神経。完全に此方を舐めている、あんなの気づくに決まってるだろ。
怨み込めて睨んだが、残念ながら比企谷家の男性はとても立場が弱いので、鶴の一声で抑え込まれてしまった。
更に俺が小学生の頃、給食のパンを食べようとしたら中から大量のボイル野菜が…。
『ヒキガエル君、野菜大好きだもんね！』
止めよう。これ以上は俺のＭＰがもたない。
「誕生日は８月８日、好物はハニーローストピーナッツ、ドライみそピーだ」
「みそピー？　なにそれ？」
わかっていた、わかっていたさ！　千葉ではないこの地域にとって、みそピーの存在が知れ渡っていないことなど！
おまけにＭＡＸコーヒーも見かけない、代用としてジョージアオリジナルブレンドを

飲んでいるが、あれはまだ甘さが足りん。
「炒ったピーナッツに味噌を絡めたやつ。パンに挟んだりご飯にかけたりして食べる。勿論、そのまま摘まんでも旨い」
「…あんまり美味しくなさそう」
味噌のあましょっぱさに炒ったピーナッツの香ばしさが上手く噛み合って最高なんだな、これが。まぁ、食べたことない人からすれば、実際に食べるまであまり受けがよくないと聞く。ドライではないほうはグロテスクなどと言われてるし。
「じゃあ、今度は…彼女とかいなかったの？　好きな人は？」
「…ッ。な、なんでそこまで聞くんだよ」
「今動揺したー！　なんか隠してるー！」
その手の話題は黒歴史しかない。小3の頃とか嘘の手紙とか折本かおりとか。数え上げたらキリがないな。
「別に隠してねぇ。ただ、なんて言うんだ…。罰ゲームで告白しなければならない対象、だってことだよ」
「え、先生に告白なんてご褒美じゃないの？」
ごく当然といった顔で此方を見る九重。淀みないその瞳に思わず視線が逸れる。言葉に詰まるじゃねぇか、困るじゃねぇか、やばいメッチャ嬉しい。

「……」
「あ、そっか。そういうことなんだね…」
しかし、九重は理解したらしい。苦笑しながら優しく頷く。
「おい、時間差で気づくな。上げて落とすのが一番キツいだろ」
「あはは！　ゴメンゴメン。大丈夫だよ、りんは先生のこと好きだから」
取って付けたような言葉を掛けられても全く心に響かないんだが。つか、お前は好き好き言い過ぎ。軽く聞こえてしまう。この辺りはやはり子供か。
子供であるため、時には優しさが人を傷つけることもわからないようである。
「そんなことより明日の放課後、お前と補習するから。親御さんに伝えとけよ」
もうこの話しは終わりにするため、無理矢理話題を変更。実は補習という名の話しなんだが、今は言う必要もない。
九重はまだ聞き足りないのか、すがるように見てくる。必死すぎ。しかし、補習を告げられたことに改めて考え耽ったのか、悲しそうな目で俯いている。
「私…。おかあさん――――」
「どうした」
「ううん、なんでもない」
何かある。そう思ったが、俺が必要以上に踏み込むことでもないと、すぐに思い留ま

らせた。大人としても、教師としても、そして俺自身としても。人の傷口に触れるのは痛みを伴う。触れる者にも触れられる者に対しても。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あ、せんぱーい！　今日は帰りが早いんですね！」

「だからなんでお前がいるんだよ」

午後6時。冬に比べ、未だに明るい空模様。学校の校門前に一色いろはがいた。本当になんでいるの。

「今朝はうやむやになっちゃったじゃないですか。今度こそお邪魔しようかなぁーと思って」

「泊めないからな」

「わかってますよ。ちゃんと宿泊先は見つけたし、遊びに行くだけですから」

何故こうもリア充は他人の家に上がりたがるのか。自分の家ならば勝手に冷蔵庫も開けられるし、ゴロゴロ出来るし、屁はこけるし、テレビのチャンネルだって変えられて、トイレにも行ける、正座を解くこともない。借りてきたネコのようにジッとする必要がないというのに。

「ご飯だって作っちゃいますよ？」
一色の手には食材が詰め込まれたビニール袋。私、料理得意な家庭的女性アピールである。専業主夫を目指している俺には、どうでもいい無駄アピールだな。
「せんせー！」
なんかデジャヴが。後ろを振り返れば九重が駆けてくる。今朝の二の舞にならぬよう両手でガードし、それ以上の接近を阻止した。
「まだ残っていたのか。もう下校時間すぎてるぞ」
「だって先生と一緒に帰り、たく…て。あ…」
九重が一色を見た。始めは呆然だったが、次第にその表情は親の仇を見るような厳しいものへと。やだなぁ、恐いなぁ。
「先輩、早く行きましょうよー」
「あ、ああ。そうか」
一色もこの状況はマズイと感じたのか、わざと急かした声で俺の袖を引く。何故か今の自分が、嫌いで仕方ないバカップルに見えるのではないかと思い、不愉快な気持ちが。
九重には悪いが学校の前で騒ぎを起こしてほしくない。突き放すようで薄情に思うかもしれないが、俺の教諭生活を平穏することが重要である。
「一色、荷物」

「……」

右手を差し出し、買い物袋を寄越せとジェスチャー。九重はその姿を見て俯き加減にランドセルの肩ベルトを握り締める。一色は一拍おいて、満面の笑みを浮かべた。

「ホント先輩って、あざといですよね…」

「身体が覚えていただけだろ」

学生の頃の習慣が甦った。買い物袋は微妙に重く、右手から慣れ親しんだ感覚が。俺もすっかり、一色の手玉に取られている気がする。いかんな、ＡＴフィールド全開にして拒絶を強めなければ。

「嬉しいな…」

大変です碇司令！　ＡＴフィールドが中和されていきます！

その、はにかんだ笑みは久しぶりにグッときました！

「九重。ちゃんとまっすぐ家に帰るんだぞ」

「り、りんも一緒に行きたい…！」

「行きたいって、お前。無茶言うな…」

いくら先生生徒といえど、交流にはモラルと限度がある。教育委員会やモンスターペアレントの格好の標的になりかねん。仕事はしたくないが、厄介事を起こしたくないのも俺の信条だ。

「でも…」

「これがイケメンでエリートでみんなから好かれる性格のヤツなら、まだわかる。だが、お前が今行きたがっている家のヤツは、目が死んでて平々凡々、終いにはクラス中から嫌われている先生だ。そんなヤツの家に行ったとなれば、周りはどう思う？　少なくとも、好意的な対応はされない」

「うん…」

そこは納得しちゃうのかよ！

「ま、まぁ…そういうことだから。寄り道しないで絶対に俺みたいな怪しいヤツについて行くなよ。防犯ブザーは持ったか？　それから助けを呼ぶ時は大声で、逃げる時はどこでも良いから知らない家でも良いから勝手に上がり込んで、それから――――」

「大丈夫だよ、先生」

此方を安心させるような笑顔。だが、その笑顔を俺は見たことがあった。つい最近までクラスからイジメられ、それでも平気だと言ったあの笑顔に。そして由比ヶ浜にどこか似た雰囲気を纏って。

「おう」

ならばもう、それ以上言えることはない。昔からそうだった。この笑顔に関わってい良いことなど、何一つ思い当たらないのだから。

一色を連れて九重に背を向ける。俺達の姿が見えなくなるまでずっと見続けていたのは、振り返らずともわかっていた。

「ずるいわ」

ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】３

「へー、ここが先輩の…。綺麗に片付いているというか、殺風景というか、何も無いというか、つまらな――――先輩らしいです！」

あの、だからなんで言い直すの？　最早上げて落とすのがデフォみたいに感じちゃうから、余計な気遣いやめてね。最強化したラスボスが弱体化した時のレベルで落胆しちゃうから。

此方が苦い表情をわざと見せているのに、一色は気にした素振りを見せずにヅカヅカ上がり込む。恐らく財布やら化粧道具だろう、それらが詰め込まれたハンドバッグを無造作に置くと俺のベッドへ近づき、何故か下の隙間を覗きこむ。

「何してんだ」

「ゴキブリホイホイが無いかチェックしてるんですよー。私、虫とか苦手ですからー」

いや、今更そういうアピールいらないから。俺がどれだけ一色のそばで黒いところを見ていたか知っているはずだ。

「てっきり、エロ本でも探しているのかと思ったよ」

「は？」

ふーむ、この反応も懐かしいな。本当に意味を理解していない、なに言ってんだコイツみたいなムカつく顔。やはり世代が違うのか、一色あたりの年齢だとそもそもエロ本の存在すらないかもしれない。今時はスマホやＨＤＤに隠せるからな。実際に俺もそうだし。

「そ・れ・よ・り、台所借りますね！」

「好きにしてくれ。あと、火には気を付けろよ」

火傷でもされたりしたら、堪ったものではない。

「わかってますよー、火事にしませんから！」

「いや、別にそういう意味じゃ…」

「え？　じゃあ、どういう意味で……」

一色は俺が何を言いたかったのか、今わかったようだ。戸惑った様子で俯き此方から視線を逸らす。…なんだよその反応。懐かしの、口説いているんですかトキメキましたけどやっぱ無理です御免なさい、高速フラれがあると思ったのに。

それを待ち望んだ俺もどうかと思うが。クリムゾン的な性癖でもあるのだろうか、悔しい…でも感じちゃう…！みたいな。ビクンビクン

「先輩、ちょっと退いてください」

「お、おう？」

一色はそれ以上何も言わず、台所への道を塞いでいた俺を押し退けた。かなり冷たい声だったのですれ違う時、表情を確認しようとしたが、残念ながらセミロングの髪が邪魔して全く見えない。

自分の家なのに、この居たたまれない気持ち、なんだろう。逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ。

「何か手伝うことはあるか？」

「いえ、何も無いです」

背を向けたまま語る言葉に拒絶を感じる。此方来んなという三天結守を。

いつもなら帰ってきて早々シャワーを浴びるが、一色いる手前そうはいかない。なんか誤解を招きそうだ。食事の仕度も出来ないとなると、俺に残された作業は一つ、明日の授業の準備くらい。

帰宅してからも仕事など嫌だが、必要なことである。仕事は辞めるまで無くなることはない。どうあがいても仕事はやってくる。少しでも楽をするために必要なのはサボタージュではなく、如何にして効率良く終わらせられるかだ。

授業の流れを組み立て、どこからどこまで進めるか、どこを重点に置くか、考察を続けていく。足りない部分と補強は宿題で補い、当然それも宿題であるため今の内に完成させておく。

するとどうだろう、あら不思議。明日の仕事がちょっと減ったわ。この作業における労働費用、プライスレス。

「せんぱーい、出来上がりましたよー」

出来るの早くなーい？　経過して一時間ちょっと前ぐらいなんだが、仕込みも無いのに何を作ったのか逆に気になる。

「じゃーん、しょうが焼きです！」

真っ白い皿には薄切りのバラ肉が、飴色の醤油ダレをまとわりつかせながら、デンと盛り付けられていた。更にキャベツの千切りを、これでもかと山のように積み上がられ。…コイツ、あまり料理得意な方ではないな。この盛り付けに拙さが見受けられる。バレンタインの時は上手く出来ていたため、丁度雪ノ下と由比ヶ浜の中間ぐらいに位置する。

「意外だな。お前ならオムレツとかシーザーサラダとか作ると思ったんだが」

オムレツはオムレツでも、スフレオムレツとか超オサレなヤツとか。

「…何言ってるんですか、先輩相手にそんな見栄とか張りませんし。そもそもめんどくさいです」

それが葉山などの相手ならば喜んで作っていたであろう。葉山せんぱーい、火傷しちゃいましたー（嘘泣き）みたいなシチュエーションを交えて。俺の場合は素直に気を

付けてるじゃねぇか。お利口さんめ。
「まっ、別に良いけど。俺の好みだし」
女子の手料理でオサレ系が出ても困るわ。一口目とかメッチャ気を使うし。あれウケルの、女子だけだからな。
あとは健康食事とか惣菜だけとか、よくわからん郷土料理とか。
「そりゃあそうですよ。わざわざ先輩の妹さんからリサーチしたんですから」
「何を勝手にウチの妹と交流持ってんだよ…」
小町ちゃん？　知らない人と話しちゃダメって、お兄ちゃん言ったよね？
「雪ノ下先輩や結衣先輩が知ってるのに、私だけ知らないとか仲間外れじゃないですかー。川崎先輩ですら知ってるのに…」
やだ、みんなして小町ちゃんの奪い合い？　今、小町ブームでも流行っているのだろうか。悪くない。
「先輩と違って、素直で凄く可愛い子でした！」
「全く痛みを感じない悪口だな」
俺に似てないとか分かるし、可愛いのも超分かる。それにしても語り口からして、それほど悪くない仲のようだ。てっきり同族嫌悪とかあると思ったが。どっちもあざといし。

「さぁさぁ、それより早く食べてくださいよー！」
「お、おう？」
確かに。出来立ての料理を冷ますわけにもいくまい。半ば強引とはいえ、一色も短い間で作ってくれたわけだし。一言、小さくボソリ〝いただきます〟と呟き、箸に手を伸ばす。何故か一色が、食い入るように見つめてくるため思わず手汗をかく。
一色、味の評価が気になって緊張してるな？　違うか、緊張してるのは俺か…。
下らないことを考えつつ、一口粗食。そして、旨いの一言を言おうとした、その時。
「食べましたね？」
意地の悪い笑みを浮かべた一色がそこにいた。
「…吐き出していいか？」
「ダメです！　これで先輩は私に借りが出来ましたから！」
なんてことだ。いや、わかってた。わかってはいたんだ。絶対何か裏があるのではないかと。一色が俺にわざわざ手料理なんて作るわけがない、何か頼み事をするために千葉から遠路遥々来たのだから当然こんな展開になることだってわかっていたはずなんだ。…あたしって、ホントばか。
「俺、奉仕部じゃないんだけど…」
「先輩が食べた豚肉、高級な黒豚を使っているんです。しかもここまで来るのに、一体

どれだけ時間かけたと思っているんですか。経費も掛かってるんです、経費が！」
険しい顔でテーブルをバンバン叩く一色。やめて、下に住む山田としあきさんがキレるから。
それにしても黒豚か、なるほど確かに旨いわけだ。脂身はサッパリしているし、赤身の部分は箸でホロホロと分けられる柔らかさ。きっと、醤油も良い物を使ってるに違いない。
「わかったよ。食べながらでいいか？」
「はい、勿論！」
満面の笑み。了承した途端にこれである。んー、良い性格してるな。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

一色いろはの依頼は、簡単に言うと相談だった。現在、デパートの食品関連に勤めている一色だが、近々目の前の通りで大規模な祭りが行われるらしく、デパートも参加するようだ。出し物としては地元の特産品などで種類が豊富、数が数だけに選別を行い非常に忙しいらしい。しかし、問題はそこではなかった。
祭りといえば、何が思い当たるだろうか。花火、浴衣、踊り、アバンチュール…は除

外して様々な物がある。その中でも特に重要で祭りのスポンサーであり、危険な存在、出店。問題はこれだった。

出店といえば、だいたい営業しているのは強面で背中に綺麗な絵画が彫られているアッチ系の人達。今の時代、彼らが生きにくい世の中になっており、その数は少しずつ減ってきているが、それでも確かに存在はしている。俺も指が何本か無い人がたこ焼き作ってるの見たことあるし。

話しを戻す。

彼らが出店を出すうえで最も大切にしているのが、営業場所の確保だ。商売で場所というのは非常に重要であり、イベントが行われる近場と会場隅みでは、まさに売り上げが天と地の差がある程。店を出すにもショバ代（場所代とも言う）を払う必要があり、所によっての値段が変動もあまりない。同じ場所代を払うというのに売り上げに差がつくのは、かなり死活問題であるとわかるだろう。その場所代も洒落にならない額であり、大規模な祭りならば一件で3～5万（あくまで目安）。

うん、ちょっと額がおかしいね。一晩土地を借りるだけで並みのホテル以上とか金銭感覚が…。

しかし、この場所代を払わないですむ方法がある。出店としてではなく、地元商店として営業すれば場所代は必要ないのだ。詳細は出店組合と地元商店の違いによるもの

なんだが、流石に長くなりそうなので説明は省く。

これに目をつけたのが、一色の上司であり食品関連の部長。祭りのイベントが行われる、出店組合で最も売り上げが高い場所を確保しようと考えたのだ。場所代は必要無いし、大売り上げは間違いないだろう。商人としては当然の考えだ。

しかし、その後対応が良くなかった。そいつは自ら提案しておきながら、その後の交渉を全て一色達部下に任せてしまったのである。手柄は部下に譲りたいとかほざいたようだが、そんなわけがなかろう。

相手はまともに交渉や常識が通じない８９３。彼らの生命線である部分を奪うやり方であり、下手をすれば自分の首が文字通り飛ぶ危険性がある相手だ。一色の上司は間違いなく蜥蜴の尻尾切りを視野に入れていた。コイツらを犠牲にしようと。

社会において、部下の手柄は上司の手柄。上司の失敗は部下の失敗という格言が存在するくらい当たり前の行為。実に人間らしいではないか。愉快愉快、超ウケル、笑っちゃう。

一色は女性だから最悪命を取られることはないだろう。女子供に手を出すのは彼らの矜持に害するから。だが、〝手を出す〟ことは有り得る。流石に一色は気づいていないかもしれないが、もしかすれば自分の後輩が風俗で働いていた、なんて展開もあるかも。二流のエロゲーじゃん！

ホント、嗤っちゃうくらい――――。

「――――むかつくな」

自分でも驚くほど低い声が、夕日に染まる教室にポツリと零れる。

「何がむかつくの？」

開けっ放しだった教室のドアに九重が一人立っていた。室内は俺だけが座り、周りには誰もいない。他の生徒達は帰宅したあとである。九重の表情は西日で暗く見にくくなっていたが、この子の綺麗に整っている顔立ちのおかげでハッキリと浮かび上がっていた。酷く無表情。

「…来たか」

二人っきりの教室。昨日約束した補習の時間が始まる。

「親御さんにはちゃんと伝えたか？」

「うん…」

珍しくか細い声の九重。適当に生徒の机を見繕い、向かい合わせの席を作った。すると、九重に背を向けた時、腰に軽い衝撃が。コイツ、俺の腰に抱き付いていやがる。

「何、どした？」
お尻に顔を埋めるのは、止めてくれませんかね。いらぬ誤解を招く。
「やっと、二人っきりになれた…」
九重が顔を上げると、嬉しそうな表情で此方を見つめる。濡れた瞳が揺れ、長い睫毛がしだれ落ちていた。頬に朱が差し、唇は半開きで熱い吐息が。完全に蕩けた顔をしていたのだ。
「…っ」
思わず喉がなる。コイツ、本当に小学三年生か!?
「い、いいから離れろ…！」
官能的で情愛に満ちたその顔は、女性経験が無い俺にとってあまりにも毒である。もしもロリコンが相手ならば大変なことになっていたに違いない。女性経験があった場合もまたしかり。俺には劇薬に等しいからこそ堪えられたエロスだった。
「ごめんなさい」
つい強い口調で言ったせいか、九重は申し訳なさそうに俯く。なんなんだろう、いつもの楽しげなセクハラとかけ離れているせいか、此方も戸惑ってしまう。落ち着けと心で何度も念じ、平静な態度を装いながら九重を席に座らせた。
「今日は何で此処にいるか、分かるな？」

「うん。りんが、悪い点取ったからだよね…」

「違うな」

その通りではあるが、半分正解で半分間違いだ。実質、これは補習ではなく話しをするための舞台である。今回、九重の点は極端に酷い。宇佐も言ったよう基本的にコイツの算数の点は学年トップレベルだ。原因を考えれば、真っ先に教師である俺に問題がある……と言いたいが、九重の宿題プリントを見ても間違いは殆どなく、また授業中は他の生徒達に比べ真剣に聞き入っているコイツが、鏡のように理解力が足りないとも思えない。実際に黒板の前で問題を解かせてもキチンと出来ているし、俺の教えに間違いはないとしか考えられないのだ。

となると、導き出されるａｎｓｗｅｒはただ一つ。

「お前、わざと間違えているだろ」

九重は申し訳ない表情から、静かに狼狽へと変化した。

ぼっちのじかんＥＸ【一色いろは】４

「なんでこんなことした？」

九重は答えない。怯えた様子で此方を見る。別に脅かしてるつもりはないんだが、やはり子供は秘密がバレると罪悪感から保守的な姿勢に変わるようだ。大人なら開き直る場合がよくあるが。

しかし何故だ、何故ここまで下手になる。俺と最初に会った頃は怖じ気づくことはなく、挑発な態度で恐れず攻めていた。まるで俺のことなど、眼中に無いように。

「だって、ひとりじめしたかったから…」

泣きそうな表情で少しずつ絞り出された言葉。主語すら使われていないそれに此方としては少々困惑してしまう。

「…もうちょっと詳しく」

「りんが、先生を」

どんだけ独占したいんだよ、コイツ。将来彼氏とか束縛しそうだな。顔は間違いなく美人になるが、性格で苦労しそうである。平塚先生みたいに。まぁ俺は、そういうのも

好きなんですがね。

特に戸塚から束縛されたい。

「独り占めといっても、この学校じゃ俺の相手をする奴なんてお前ぐらいだろ。ぼっちの環境理解してる?」

周りは基本無視だからな、俺の存在を認識しているのはあと宇佐ぐらい。鏡は論外で。

「違うもん。あの、いろはって後輩」

「あー、なるほど…」

ここで一色か。確かに九重から距離を置き始めたのは一色が現れたあたりだったから、そう感じてしまうのも仕方ない。実際にそれまでしっかりと九重の相手はしていたから。

だが、俺自身が九重から離れたのは何も一色が原因ではない、もっと別の、俺が築き上げた物があったからだ。吹けば崩れる脆い、逃げという名の壁が。

「私は、先生のこと何にも知らない。先生のこと大好きなのに、先生の好物も知らなかったし、イジメられていたことも知らなかった。なのにあの人は先生のことを知ってる、私が知らないことをいっぱい。付き合うことも出来るし、結婚だって出来る。誰も文句言わない。それがすごく――――ずるい」

もしも、もしかしたら、そうであれば。誰もが必ず考えてしまう、あり得たかもしれない環境、世界。それに今、九重は翻弄されている。あと十年歳が近ければ、きっとこんなに苦しむことは無かっただろうと。そんな世界はどうしようもない偽物で愚かなくらい下向きな思いだが、別段その考えは嫌いではない。絶対に手に入らないとしても、求め続ける九重に共感を覚える。

だからこそ、こんな簡単なことで俺の信条は崩れてしまうのだ。優柔不断な心が憎い。

「今度のテスト。ちゃんとするなら色々教える…」

「ホントっ!?」

一変して目を輝かせる九重。向かい側に座る席から立ち上がり、机を挟んで俺に近寄る。近いな。目線を合わせられないので、すかさず逸らしてしまう。

きっと、いつか後悔するだろう。今ここで俺の昔話をして、九重が別のクラスになった時笑いの種にするかもしれない。今では関係が良好としても、仲違いが起こればこの子に弱味を握られたも同然なのだから。

「お、お前の点数が悪いと俺の成績も悪くなるからな。仕方ないだろ」

「うん、うん！　そうだね！」

先生の内情も流石理解していらっしゃる、小三にしてはホントに頭良いな。ますます

教えるのが怖くなったが、それでも…これだけ喜んでくれるのなら今だけ悪くないかもしれない。さて、何から何まで話すべきか…。

「ねーねー、せんせー！」

「なんだ？」

「今度のテストで満点取ったら、りんとエッチして！」

前言撤回、やっぱ恐いわ。コイツ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

一人、思考を続ける。深夜の自宅で寝転びながら。

九重が何故あそこまでませているのか、そして何故俺を求めるのか。父親どころか交際経験がない俺が考えたとこで、出せる答えなど、たかがしれる。情という物から離れていた俺に、どれだけ時間を重ねても悪い方向ばかりに答えが行き着く。宇佐の時は自身の経験があればこその対応だ。こんなことを続けていても、わからないことをわかった気になるだけ。

本当に相手側が求める答えにはならないのだ。だというのに、何故思考を止めない？

「なんなんだ」

個人に心が揺れすぎだ。ちょっと自分は教師に向いていないなどと考えも入ってきた。らしくないことが頭を過る。

先日想ったばかりではないか。期待するなと、無関心であれば期待も何もない。教師に向いていないなど、当たり前のことではないかと。

床からベットに横たわり、スマホのアドレス帳を開いていく。戸塚、小町、親、一色、あーしさん、川崎、ルミルミ、由比ヶ浜、雪ノ下と学生の頃に比べてラインナップが充実したそれらをジッと眺めながら流していく。この中の誰かがその答えを知っているのではないか、そんな気がして。そして最後に開いたのは。

【平塚先生】

いやいや。…いやいや。

無意識に選んだけど流石に無いわ。　そりゃ確かにこの人は勘も良いし鋭いし博識で先生としても一人の人間としても尊敬出来る存在だが、平塚先生に頼むのは気まずい。

だって俺の住所知っていたことに関する謎が解けてないし、ぶっちゃけ怖いし。画面ギリギリの指が思い止まり、ホームボタンを押そうとしたが、画面にタッチしていないにも関わらず、着信を入れてしまう。

「うおおお!?」

説明しよう！

スマホのタッチパネルは接触による操作ではない！　実のところこれは、タッチパネルその物の中に縦と横に走る多数の電極の行列があり、タッチパネルの表面はいつもわずかな薄い膜で出来ている静電気で覆われている！　そのためタッチパネルに触れると、その静電気を指がすい取りセンサーがどこの静電気がすい取られたかを読み取ってタッチされた場所を特定し、操作が実行されるようになっている！　つまりはパネルに触れてというよりは、静電気に触れたことで反応する、ということなのだ！

…説明が長くなったが、指がギリギリまで狭まっていれば画面に直接触れずとも反応するのは当然だ。

大慌てで止めようとしたが、既にコールは始まっている。繋がるの速すぎぃ！

そして〝ワンコールの途中〟で久方ぶりの声が聞こえた。

『ひ、比企谷か？』

早くなぁい？　なんでワンコール終わる前に出れるんだよ、まさかこの人…ずっと俺からの連絡を待っていたんじゃないだろうか。いや…変なことを考えるのはよそう、たまたま手に持っていた可能性がある。ネットサーフィンしていたとか、そんな感じで。

「お、お久し振りです」

『嬉しいよ、君からこうして連絡を寄越してくれたのは』

電話越しからも伝わる、先生の噛み締めるような喜び。深い息を吐くような口調は、昔となんら変わらないものだ。

「ええ、まぁ…俺もまさかとは思っています」

カラカラとした笑い声が聞こえた。全くもってそうだ。そもそもこの電話も事故みたいなものだから、有り得なかったものなんだが。

『だろうな。けれど、こうなったからには何か伝えたいことがあるからじゃないのか？』

察しの良さも変わらず。ホント、俺と相性良いな、この人。

「相談したいことなんですけど、まずはどこから話せば良いのか…」

『何。丁度暇をしていたとこだ。長くなっても構わない、一から順に言ってみるといい。私は君の言葉を蔑ろにしないさ』

恩師の優しげな言葉に思わず引き込まれてしまう。初めはそんなつもり無かったというのに、気がつけば俺は全てを語っていた。中村先生のこと、宇佐のこと、鏡のこと、一色のこと、俺の立場、九重のこと。

何が起きてどのように解決したのか、次の問題、一色と鏡についての解消案を提示し、そして現在わからない（九重）ことを。

『…やはり君は凄いな』

「誉めて伸ばす方針ですか」

『事実を言ったまでだ。君の慧眼ぶりは衰えていない』

平塚先生は更に付け足す。今、俺は新任でありここ数ヶ月で〝素人から実戦投入出来る教師〟として勉強している期間だ。授業におけるスキルアップを重点におくこの期間で本来ならば生徒達とコミュニケーションを取っている場合ではない。ましてや他人のことに首を突っ込む余裕など無いに等しいと言う。

『だが君は既に、その鏡黒という生徒の弱点と解決策を見つけ出している。一色いろはの問題についてもだ』

「考えれば簡単なことですから。それに俺のは解決策ではなくて解消案です。根本的にその人のためにはならない」

ハッキリ言って良くは無い案だ。一色については最低なやり方で、鏡に関しては教師として相応しくない。

俺のやり方はどうしても救いにはならないのだ。いつか雪ノ下が言っていたように。

『そうだな。君が一色を本当に助けたいのならば、そのやり方は止めといたほうが良い。まさか君が代わりを務めたりしないだろうな?』

早くも勘づかれたか。

「いや、なんで一色の名前が出るんですか…」

『別に良いじゃないか。君だって可愛い後輩に慕われるのは悪くない気分だろう？』
慕っているというより、扱いやすい駒のようなものじゃなかろうか。食事を利用して働かせるなど、悪知恵が上手い。わざとらしい、嘘くさい演技だとしても、時折見せるあざとくない仕草に此方はやられるのだ。きっとあれも演技なのだから、一色の御手玉技術は群を抜いているに違いない。
『全く、本当に変わらないな』
平塚先生は大分呆れているようである。そりゃね、引っ掛かる俺も俺だけどね。
『君は物事を考えるのに秀でているが、〝中身〟を理解していない。右か左かはっきりしすぎて、真ん中や上下前後を見落としている』
「なんすかそれ、ネジの白眼ですか」
『ただの例えだよ。だから君は彼女が出来ない。折角のチャンスを無駄にする』
「チャンスなんて不確定要素に手は伸ばしませんよ…」
それに、異性に関する話しはアンタに言われたくないと言おうとしたが、向こう側から冷たい殺気を感じ取ったのでやめておこう。くわばらくわばら。
『しかし、その九重りんという少女もなかなか凄い子だな。君をそこまで翻弄するとは私の予想を越えている』
それを聞くと、俺がぼっち先生になるのは予想出来たみたいに聞こえるんですけど。

考えすぎでしょうか。

『私の経験上、生徒が教師にベタベタする場合、親の愛情に飢えている可能性が高い。もしくは親に甘えたいが気恥ずかしくてその感情をそちらへ向けているか』

後者は反抗期によく見られる兆候らしい。本人としては自覚が無くとも、甘えという感情はけして無くならないため無意識の内に行動する。或いは友人の場合もあるだろう。友達はいないし、親の愛情に別段飢えていなかった俺が理解出来るはずもなかった。

『性知識については何とも言えんな。私は国語の教師であって保健体育ではない』

「そんな屁理屈言われても…」

『君の得意分野は考えることだろう？　ならばそうするしかない』

「散々考えましたよ。でも、考えたところで正解とは限りませんし」

『本当にどうしようもないな…。たまには考えることも止めて、当たって砕けることもしてみろ』

言ってることが無茶苦茶である。アンタさっき考えろって言ったのに、もう考えるのを止めろとか。つーか当たって砕けたら意味ないし。

『教師の仕事は頭で教えるんじゃない。心で教えるんだ』

「はぁ…」

『九重りんが教師のことなどすぐ忘れると思っているが、それこそ正解ではない。こうして私に連絡してくれたことが何よりも間違えた証拠さ、比企谷』

そうであった。俺にとって大きな影響を与え重要な存在であるこの人こそが、恩師であったことに気づいていなかった。覚えていて当たり前のようなことだったから。屁理屈の割に筋は通る。

「わかりました。出来るかどうかわからないですけど、まぁ…やってみると思います。多分」

『当てにならん返事だなー。君に問題があれば、私に泥を塗ることになるんだぞ？』

それはどういうことだろうか。俺の問題で平塚先生に悪影響を与えるとは。

『その学校へ君を推薦したのは私だ』

「アンタが一枚噛んでいたか…」

おかげ此方はてんてこ舞いである。

『小矢島先生、あの人は私の知り合いでな。期待の新人として押した。最近は少子高齢化の影響で教師も溢れている。コネクションが無ければ教師の仕事は貰えないんだぞ？』

コネで仕事を貰うとか、どこの奴隷国家だよ。嫌すぎる。

「初耳なんですけど…」

『小矢島先生はタフネスな見た目とは裏腹に、緩やかな人だからな。多くは語らず奥手はところがある。…そのせいで白井先生と親しく出来ないとか――――いかん、ムカムカしてきたっ』

聞かなかったことにしよう。

「そういうことなら、仕方ないですね。先生に恥をかかせるわけにはいきませんし、やってみますよ」

『その意気だ』

これ以上の言葉はない。俺は電話を切ってから、小さく独りでに〝おやすみなさい、先生〟と呟いた。直接言わないのはリア充ではないため、単純に慣れていないからだ、こういうことは。

久しぶりの会話だと言うのにあっさりとした結だとわかってはいるのだ。相手に薄情と思われていないか、不快にさせていないか、嫌われないか、後々何度でも考えて悶絶する。頭でわかっていても、出来ないことは沢山ある。

別に深い意味ではないが、例え俺がどれだけ平塚先生と相性が良かろうと、同じ職業に就いても、あの人のことを「静」などと親しげに呼び捨て出来ないように。わかっていても考えて出来ないことは、間違いなくある。

考えることは可能な限り考えた。あとはどうなるかわからない。なら、さっさと寝る

ことにしよう。当たって砕けるのも、俺の得意分野であった筈なのだから。
ひとつ、気掛かりがあるとすれば。
「来月の請求が怖いな」
電話で長話しは程々にしよう。何時間話した？　あ、やべ…ちゃんと切ってなかったわ。

ぼっちのじかんEX【一色いろは】5

「次はこの式を当て嵌めろ」

一色が此方に滞在してから二日目の放課後、俺と鏡は二人で夕焼けが射し込む教室に残っていた。いつも仲良しである九重と宇佐はいない。二人っきりの、特別補習。ただ、短絡的に指示する俺の声と、鏡がノートにひたすら筆記する音が流れるだけ。

初めはブツクサ文句を言いながらだった鏡も今では既に、口を閉ざし真剣な面持ちで問題を解き続けていく。不正解など一つも残さない程に。

やはり、ここまで劇的な変化が出たことに少なからず驚き、また正解を導き出せていることに嬉しいのだろう。作業に衰えがない。

「出来た」

「見せてみろ」

ふぅ、と溜め息を見せながら差し出される回答。そこに間違えは見当たらない。これは思っていた以上である。

俺が鏡に教えた勉強法、いや…テストで良い点を取る方法は実に簡単だ。計算問題の

意味や理解などを一切無視して、ただ公式の使い方を教えただけだ。特に文章問題に関しては何処の数字を何処の公式にどのように当て嵌めるか、ただそれだけ。

これならば例え理解力が弱い子でも、とりあえずは良い点を取れる。基礎基本に対しては強い力を持つ。だが、同時に悪い点も間違いなくあった。

応用には極端に弱くなるのである。理解力に全く力が付かないため、馬鹿正直に基本しか出来ない。しかもそれが小学生だと特に謙虚だ。小学生全ての学業はこれからにおいての基本でしかない。中学、高校と進学すれば応用が出来ない分だけ通用しなくなる。一番まずい展開だ。

そのため俺のやり方は結果的に鏡のためには全然ならない。寧ろ問題を先伸ばしにした悪手である。凡そ教師として不誠実な勉強法。

「全問正解だ」

「おお！　すっげぇ、アタシってばやるじゃん！」

此方としては、その眩しい笑顔がキツい。修正のためにこれからもこの子には注意をしていく必要がある。…下手をすれば、進級＆クラス替えの時は、着いていくことになるだろう。それが、このやり方を取ってしまった俺の責任であり、唯一〝まとも〟な方法なのだから。

「良くやった。ジュースでも飲むか？」

「おごってくれんの？」

ぼっち慣れしていない奴に一人寂しく勉強させたからな。御褒美はあってもバチは当たらん。

「百円ちょっと出すくらいの懐はある」

校外の近場にある自販機。道路の片隅に若干錆びれたそれに手を伸ばす。マッ缶はない、クソ。鏡はミルクティーを選択。それも色々あるよな、花伝、午後ティー、リプトンとか。

マッ缶と同じ特長を持つ長い缶コーヒーをチビチビ口に含む。とりあえず、鏡に関してはクリアしたと言っても良いだろう。あと残るは九重と一色か。九重はまぁ…ちゃんとテストを受けてくれると約束してくれたし、問題はない。流石にあんなお願いは聞けんが。

残る杞憂は、一色。俺の〝やり方〟は却下となったが、もう一つの案、まともな方法もある意味では抵抗がある。果たしてアイツが受けてくれるかどうか。

「ねぇ、ゾンビ」

「なんだよ」

つか、いい加減ゾンビ止めろ。呼び慣れてしまって、思わず返事しちまったじゃねぇか。

「りんちゃんと何かあった？　最近元気無かったから…」
うつ向きながらポツリ。クラスでも一番体格が小さい鏡。その呟きはなおのこと、この子の小ささを感じさせる。小学一年生程に。どこまでもませていて、暴力的でもやはり幼い子供なのだ。人の感情へ敏感に反応しようと。
「別に何もねぇよ。またいつも通りになる」
「ならいい」
淡泊な返事にこれまた鏡も淡泊に返す。目に見えない壁を感じさせるが、逆に俺としては此方が有難い。
まぁ最も、保証は無いがな。だが、一喜一憂する人の感情について考えても仕方ないこと。大事なことは考えるんじゃない、感じるんじゃない、流されろ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「待たせたか？」
「いえ、今来たとこです。…あっ！　今の後輩的にポイント高くないですか！」
翌日の夕方。仕事終わりに近場のファミレスで待ち合わせした、俺と一色。早速小町の癖が移っているようで、出会い頭から不快感が。許せん、それは小町の専売特許だぞ。

「ないな。甘く見ても精々一ポイントだ」
「低っ！」
因みに一億ポイントが満点だが、一色にあと必要なのは９９５７８８４ポイント。俺の知人で唯一達成しているのは小町と戸塚である。寧ろカンストしているレベルで。
「何か飲みます？　奢りますよ」
「……」
「他意なんてありませんから！」
そいつは良かった。じゃあコーヒーでも頂くとしよう。
「今日帰るのか？」
ウエイトレスが運んできた湯気立つコーヒーにミルクとガムシロ、グラニュー糖をぶっこんでいく。一色が青ざめた顔で此方を見るが、構うものか。これから苦いことしか言わないのだから。
「え、えぇ。まぁ…」
「お前からの依頼だがな、提案として二つある。好きな方を選べ」
「二つですか？」
まずは一つ目、真っ先に思い付いた俺の案。一色は８９３から穏便に場所を確保したいとお願いしたが、別に何も馬鹿正直に確保する必要は無いのだ。一色としては場所な

んて何処でもいいわけで、平和的にことが済むのならばそもそも確保する理由すらない。

だが、上司の存在によりそうもいかない。上司の理由が一色の理由だから。ならばどうすべきか。またしても斜めから考えてみよう。

「一色、お前なら上司にどうやって心変わりさせる」

「そうですねぇ、とりあえずテキトーに持ち上げてテキトーに相手して、お願いしますとかー。…でもやりたくないんですよねぇ、その人スケベだし」

オゥケィ、良くわかった。実に一色らしい。

「よし、今度は質問を変えよう。両者、食品関係の販売業だが、そのために最も大切なことはなんだ？」

「先輩ってナゾナゾ好きなんですか…」

うるせぇ、これは格好つけてるだけだよ。

「えっと、やっぱり味じゃないですか？　あとは値段とか雰囲気とか」

「残念、違うな。正解は衛生管理だ」

味、素材、値段、雰囲気、好み、愛情を圧倒的に越える。重要課題。料理人、いや…人間として最低限クリアしなければならない、飽くなき徹底事情。

「それは、そうですけど…。それとどういう関係が」

「さて、一色。お前ならゴミや汚物にまみれている場所で売られている食べ物に手を出すか？」

「――先輩、マジで言ってるんですか」

一色は本気で戦慄していた。

「それなら確かに誰もそんなとこで商売なんてしたくないですよ。でも、バレたら大変なことに…」

社会的だけじゃない。最悪警察沙汰で８９３さんが知れば最早命の危険すらある。しかし、やりようによっては一色がその危険性を受けないで済むこともあった。

「先輩まさか、〝そういうつもり〟じゃないですよね」

「……」

一色の冷たく、そして嫌に低い声が、小さくとも間違いなく届いた。沈黙は肯定と受け取ってもらって構わない。一色は、テーブルの上に載せられた俺の拳に手を掛ける。

「なんで――」

微かに震えていた。

「なんでそんなやり方、思い付いちゃうんですか。おかしいじゃないですか、普通に頼み込めば済むかもしれない話しなのに…」

「〝普通〟に頼み込んで済むなら、お前は此所にいないだろ。上司の話しからして、と

てもまともな奴とは思えんしな」

彼女はとても人を手玉に取るのが上手い。だが、それが必ずしもとは限らない。実際に見ていない俺では憶測でしかないが、上司という立場を理由して関係を迫る人間がいてもおかしくはない。サラリーマン事情で上司は支配欲が高まり部下を意のままにしようとする傾向があると聞いた。

自分の手柄に部下を犠牲にする奴になんのモラルがあろうか。

…それより一色さん？　貴女さっきから手に力込めすぎよ？　拳がギリギリいって痛いわ。

「私、そんなの嫌です。先輩にそんなことさせるくらいなら、あの人の…っ！」

「待て待て、何もこれしか方法がないわけじゃない」

ふぇ、っと。変な言葉を上げて此方を見る。なんで涙目なんだよ、可愛いなオイ。あっぶなー、危うく惚れちゃいそうだった。

「最初に言っただろ、二つ提案があるって」

合点したのだろう。ぽかーんとした表情から一気に顔を真っ赤にして、思い切り俺の手の甲をつねった。痛い痛い止めて。

「だったら紛らわしいこと言わないでくださいよ！」

「いや、だからお前が勝手に…」

「は？」

怖ッ。いろはす怖ッ。さっきまでの可愛い女性は何処へボソンジャンプしちゃったんだよ。

「…で？　そのもう一つの方法ってなんですか。さっさと教えてください。あ、マシなやり方じゃなかったら平塚先生にチクりますから」

ふふん、平塚先生にはとっくに知られているのだよ、ワトソンくん。どちらにしても、まともなやり方なので問題は無い。…ただ、俺としては此方の方がやりづらいがな。

「雪ノ下に頼む」

「え、雪ノ下先輩に…ですか？」

「正確にはアイツの父親だな」

出店を出すうえで必要となるのが道路使用許可だ。個人ではなく公共の土地だから数時間使うにも、必ず管理している警察署に申請しなければならない。当然、そう易々と取れる物ではない。一般人ならまだしも〝基本的〟に敵対関係である８９３さん相手に下りる許可じゃないからだ。

では何故か。答えは出店関係の元締めが一般人の商人であるということ。その人物が代わりに許可を取っている。そしてそのために重要なのがコネクション。俺が平塚先生と繋がりを持っていたように、他人を動かすには大きな力となる。

「まだ県議会議員だったはずだ。町の催し、ましてやたった一店舗の店なんて一声で動かせるだろ」

「で、でも相手にバレたらヤバくないですか？　雪ノ下先輩に迷惑かけちゃうし…」

どうだか。あの妹にして狡猾な姉だからな。同じＤＮＡを持つ親がヘマをするとは思えん、そこらへんの内部事情は痕跡残さずやりそうな気がする。

「バレるとしても精々警察署に議員が絡んだくらいだろう。ましてやお前のとこまでとか有り得ん。対象となる人間があまりにも多いからな」

まず見つけるまでに諦める。それに店舗は動かすだけで別に商売をさせなくさせるわけではない。深い執念はけしてないはずだ。最も、一色の上司はすぐに特定されそうだが。発案者はソイツなわけだし、あとはソイツがどうなろうと俺の知ったことではない。此方は悪人であっても欺瞞な善人を気取るつもりもないわけだから。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「悪いな、あんま役に立てなくてよ」

結局、俺の案は却下されたわけだ。始めから一色は俺の所ではなく雪ノ下のもとへ行くべきだった。経費の無駄使いさせちまったな。

「何言ってるんですか、先輩には雪ノ下先輩のお父さんにお願いしてもらわなければならないんですよ」
「なんで俺なんだ…」
「私より先輩の方が繋がりあるからに決まってるじゃないですかー。知ってるんですよ、お父さんから困ったことがあれば頼りなさいって言われてることぐらい！」
誰だ、余計なこと教えた奴。平塚先生は…ないな。妹の小町…うん、アイツに違いない。
「…わかったよ」
いきなり父親の方はハードル高いから雪ノ下に連絡入れよう。…あれ、急に胃が痛くなってきた。受話器から殺されたりしないだろうか。
「それじゃ、私そろそろ行きますね。予定時刻が近いですし」
会計を済ませ、店から出る。小さめのスーツケースを引きずりながらセミロングの髪を揺らすその後ろ姿を、ボゥと見ながら気づけば外は暗くなり始めていた。見慣れたはずの一色に違和感を感じる。少女から、大人の美女に変化しかけてる成長という名の違和感。
普段、毎朝鏡を見つめる自分にはその様子が見られないのに、彼女にはそれがある。俺は、やはり変わることがないのだと実感した。変わらないことを望んだのは他でもな

い俺自身だというのに。

「ねぇ、先輩？」

「なんだ」

「本当に、それだけだと思いますか」

あの、なんで主語述語をちゃんと使ってくれないの？　口下手な俺が思うのもあれだが、せめて会話のキャッチボールはしようね。

「…Ｏｎｅ　ｍｏｒｅ」

ちょっとむくれた顔で此方に振り替える。夕陽により、その頬が僅かに赤みを帯びているように見えた。

「わざわざ依頼のためだけに此所に来たと思いますか」

「……」

口元に柔らかな孤を描いて短絡ながらも、先程より明確に答える。目が笑っていなかった。

「お金はたいて、わざわざ遠くに、泊まり込みで、食事も作って、本当に依頼のためだけに来ると思いますか」

一色の問いに答えない。答えられないというより、答えられなかった方が正しいか。偶然にも一色の背景に見慣れたお下げ髪が目に入ったからだ。アイツ、なんでここにい

るんだよ。
道端の隅に蹲るように座り込む、九重りん。
「一色、スマン」
「え、ちょっ…先輩!?　何処へ行くんですか！」